教会教育

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年七月一日発行 毎月一日発行 第九巻第七号



7

1961

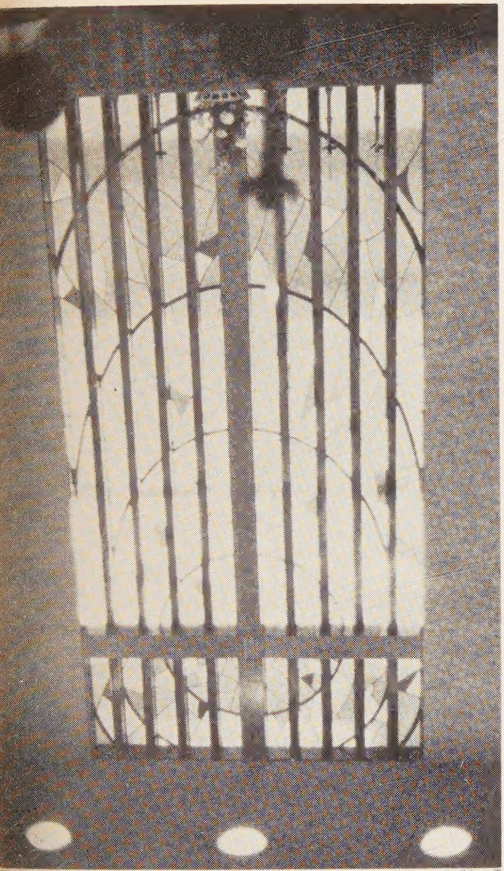
夏こそキリスト教教育の時

1961 **7** 目 次



日本聖公会

東京聖三一教会







創立当時（明治7年）の立教学校（築地1丁目）では，教室の一つを用いて礼拝を行い，明治16年頃には講堂で礼拝が守られた。明治22年，その会衆と深川聖三一教会（真光教会の前身）から分れた会衆によって，築地に創められたのが今日の東京聖三一教会である。

当時赤煉瓦の聖堂は東京教区設立まで北東京教区大聖堂であった。大正12年9月震災で破損焼失，昭和2年7月青山1丁目に鉄筋コンクリート建の聖堂を新築，昭和20年5月戦災に因り焼失，昭和25年10月復興。更に昭和36年3月21日現在の地に，写真の通りの新聖堂を奉献，東京教区仮大聖堂として使用され今日に至る。

創立者	ウイリアムス主教
初代司祭	名出保太郎師
歴代司祭	小林彦五郎，落合吉之助，多川幾造の諸師
現在	秋山基一，坂下内匠，岩前宏の3司祭。

世田谷区北沢2ノ154

キャンプ場では、必らず礼拝の場所が作られるが、細い木を皮のついたままで十字架をつくって立てることもある。



いものである。

私たちの出席したキャンプ地では日本人による折紙の鶴とイギリス人の歌とが評判よく残っていた。

設備

冬キャンプ地は教派の州連合会の所有地、州公有地（貯水池畔）の特別長期備用等で半永久的な施設をしている。キャビン、温冷水給栓、水洗便所、食堂、台所、等は立派であった。湖畔、川辺でない所ではプールがあった。

広いキャンプ地なのでキャビン地区の他に礼拝所、林の中の各グループのキャンプ・ファイヤー地、グループのクックアウト、その他グループ活動のため他から隔離されたもの全体のキャンプファイヤー地等うらやましいほどであった。

機構

一グループは十人乃至六人位。これに一リーダーがつくのである。

一教会の青少年全員が一週中に出るのでなく夏中の全キャンプに適当に他教会の者と交るように按配されて出席する。

一日の日課は大低七時一五の分の起床、夜九時の就床で、極めて自由なものである。その後でグループリーダーの打合せ会がある。あるキャンプでは、これに花の咲くことがあった。新刊の神学書を講じ、これをその日の出来事に結んで語り合うのである。精力的なのには驚いた。夜ふかしは平気らしい。

主題

昨年だけの特別なものかどうか判らないが〝創造主なる神〟が主題であった。

キャンプでは名札を掛けさせるが、それを作らせるのに凸レンズと板切を与え、自分の名を太陽で焼けと云う。あとでこれが神の力の偉大さの教話と結ばれると云うやり方の所もあった。自然の中からの発見という日課でめづらしいと思うものを集めさせたり比べさせたりする。

土曜日はキャンプ地清掃をするが、多くの場合、「此の一週間神様から使わせていただき我々の管理（スチャワードシップ）に委ねられた此の美しい所を神様におかえしする時が来た。感謝して掃除をし、キレイにしてお返ししよう。明日の午後から神様は別のグループにお托しになるようだ。その時、神様にお世話のかからぬようにしよう」という風な言い方であった。

こう言われたからと云って、全キャンパーが忠実に片付けると云う訳には行かないが、一般的に日本人より素直に、よく立働いていた。遊ぶことも何か素直で全体的にたのしく

夏を活かせ

――アメリカ・キャンプの思い出から――

西田　進



私共は昨年六月一九日から八月二七日まで一週間単位のキャンプに奉仕した。ジュニヤーが一回、ジュニヤ・ハイ九回、ファミリー二回であった。

場所はミズリー州のウインデーヴル。アイオワのアクレー。イリノイのブルーミントンミシガンのサウス・ヘヴン。インディアナのメロム。イリノイのプリンストンと数カ州の異ったキャンプ地であった。

準　備

六月中旬から八月の終りまで州の宗教々育部長一家がキャンプ地内の住宅に引越して来て、全期間中の全キャンプを総括する。週単位のキャンプのリーダーは、自分の良しとするグループのリーダーを早目に獲得しておく。（昨年クリスマスに、すでに新年度のこれ等のリーダーを確保したと書いて来たキャンプリーダーがある）

各派の宗教々育部は新年度のハンドブック等を発行し、州に流し、州は各週リーダーに彼（彼女の時もある）はすでに得たグループリーダーに流し、キャンプ開始前半カ年中に数回の打合せをすませる週リーダーもある。

週リーダー及びグループリーダーは、食事交通費以外は皆奉仕である。大学生や高校教師、牧師等が一夏、二週間位はこうした奉仕に出ているようだ。

週リーダーは他の週リーダーとグループリーダーの勤務評定をやり、翌年採用しないことを決めたりする会を持っている。なかなかきびしい。私のような外国人を迎えることは教派の紹介斡旋による。ただし何分、大きな仕事なので度々日程の変更がある。私たちも予定のキャンプがとりやめになったことが数回あった。こうなると週リーダーからの通信、旅行の手配の変更などなかなかめんどうであった。

教派からは私共の行くキャンプにちゃんと日本に関するパンフレットが届けられてあって子供たちに配るようにしてある。

ただ一つ注意すべきことは、日本のミッションスクール等が送った、信徒でない留学生が夏のアルバイトにキャンプ巡りをしていたことだ。やはり同信の人をキャンプに送りた

これは九月から教会巡りをした時のことであるが、私共を教会で歓迎して呉れる時、ポット・ラック・パーテーでやってくれたことが度々あった。何か一品、自分の家族数だけの分量を携え一家揃ってやってくる。それを一緒にテーブルの上に置き、キャフテリア式に各自がほしいものを取り合せながら食事をする。これも一家だんらんの時をかねた教会の交りである。

後始末は各自が汚れ物を持ってかえるのでその場で洗うのはコーヒーカップ位のもの、それも、紙カップで捨ててしまうのもあって手数をはぶくのが多かった。

気安く交ると云うことは大いに学ぶべき点であると思った。

彼等の一つの強味は、親子揃って暗誦で歌える歌を多く持っていることだ。必ずしも真面目なものばかりではない。キャンプソング戯化されたラブソングなどをたのしく歌うことである。

今や日本でも家庭が大きな問題となりつつある。レジャーブーム等も上手に健康に指導されなければ却って害毒を家庭に及ぼすであろう。教会はこの時、家庭をよくするために役に立つ方策を持ち指導に当らなければなるまい。

我国への適用について

一何んとかして恒久的なキャンプ地を確保すること。これは教区レベルがよいと思う。他派と協同でもよいから大きく取ることがよい。イリノイのアクレーのキャンプは、ファーネスを設備し冬期にも利用できるキャビンを作っていた。

二、教会がその所属する青少年のプログラムには、今後は、ますます夏期、冬期の休暇期を活用することに着目し、教会がキャンプを立案すること。或は教区教育部が全教会青年の交流を考慮したプログラムを立案すること。従来、キャンプは教会の青年部教育部、時には同好者グループの行事として行われていた傾がある。

教区が夏全期間のキャンプをやり、各教職がその中一週間乃至四日の一期プログラムに奉仕するようにした、一本のプログラムがほしい。現在では、各個教会も、教区も、おそまつなものを二重にやっている損失をしている。

三、我々の方は準備がいかにも性急、素練だと痛感した。もちろん、夏期プログラムの重要性が教会として認められていないからという点もあろうが、誰がやるにしても、モット周到な準備が早くからされていなければならない。殊にグループリーダーの如き、熱心であったり子供好きであればよいと云うものではない。此の人々のリーダーとしての訓練と、一キャンプとしての和を保つ協調のための配慮が大切である。

四、家庭との連絡が大切である。親からリーダーに子供の性癖、改めさせたい点などを通知させ、生活を通して指導する任務を理解した尊敬が得られるようでありたい。

五、少数でもよいからファミリー・キャンプをやりたい。有給休暇などを持つ人々にはそれを或週に取り合せてやればできるはずだ気持が社会的に気軽になることが第一だ。我国にも今や子供の顔を見ない日のつづく親や、食事をに一緒に出ない夜のつづく親が多くなっている。従って家庭としての信仰生活も乱れ勝ちではないか。大きく考え直す必要があろう。

五、牧師方がファミリー・キャンプに出られるようにして上げてほしい。戸締りのできる牧師館。費用、気持の理解など、解きほぐしてもらはねばならぬものが多い。牧師も気軽になりたい。暇のない牧師には暇のあるためのもてあましなど理解できないかも知れない。（北光教会牧師）

すると云う見さかいが心得られているのを美しく思った。こんな所にも創造主への畏敬の念がにじみ、社会生活への訓練が現われているように思われた。

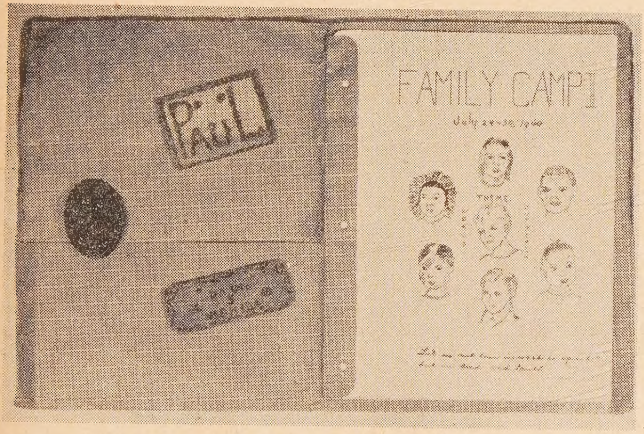
創造主を示そうとするのはよいが、キリスト・イエスについてもっと語ったらドーかと或るリーダーと話してみた。彼は、此の夏のプログラムは平素の日曜日の教育を考慮に入れている。此の一週間は自然に親しましめつつ、創造主なる神を示す。これが年間の教育の基本となることを願っている。全体を一環と見てほしい、との説明があった。

我国での夏のプログラムが時に年間のカリキュラムから遊離していることがあるのは反省に値すると思った。

あるキャンプでは最初の三日間、毎夕食の時、家への通信を持って来なければ食堂に入れない所があった。それらの通信をリーダーが読み、時にカウンセリングしているのもあった。

あるキャンプでは、その土地産の木に手工したメダルを作り（リーダーの仕事）キャンプに参加した年数を入れて渡していた。これはキャンパーの誇りでもあったようである。

これらのやり方は、キャンプを定着したものにするよい配慮だと思った。現にキャンプに参加することから献身したという牧師もいた。日曜日の午後一家揃って車で連れて来、週末に又両親が迎えに来る姿は美しいものであった。



ファミリー・キャンプのプログラムと各地の味を出したキャンプの名札。右上のは板切れに太陽光線で焼きつけたもの左のは少し斜めに木を切って年輪を面白く生かしラッカー仕上げをしてある。下のは皮に刻んだもの。これは各自が作られるが、中高生など大得意だろう。

ファミリー・キャンプ

ミシガンで一回とミズリーで一回と家族のキャンプがあった。

二カ月位の赤坊をつれた若夫婦から、末っ子一人をつれた中年者なぞ、どちらも一六、七家族が集っていた。一家が一キャビンに寝るのである。

出席者は、教会からや主人の勤めている会社が補助して費用を助けているのもあった。セールスマン、教師、農業、会社員、等とりどりの職業人である。

商事会社は社員の家庭がうまく行くことにより結局、会社の利益になると考えているとのことであった。教会は夫婦揃った礼拝出席者をとり戻すことにもなる由でその育成に力を入れているらしい。

よき家庭を作ることの大切さが切実になって来ている。家庭キャンプでの話題は、信仰の訓練にもなり、教会運営の理解にもなるようで、両キャンプとも成功であったと悦んで明年再会を約している幾組かがあった。

現実の世相と教会と家族関係

そうした家族キャンプというものが、従来の、主に青少年や児童のみを対象として行われていたキャンプや、せいぜい一晩泊り位の教会キャンプなどに対して盛んになってきたのはどういう理由からであろうか。それらはどのように積極的な意味を持ち、又役割を果しているのだろうか。さらに、日本における夏期キャンプの実状に鑑みて、さまざまの角度から考えてみたい。

まず第一に現状の分析として挙げなければならない事は、現代における教会生活が不健全な分裂症状を呈しているという事である。教会は一つの体であり、合同の礼拝の中にそのことを経験するのである、というような事を口にしながらも実際問題としては、現代の教会は、一般社会が直面している深刻な世代のギャップ、家庭の分裂という問題に巻き込まれこそすれ、決してこれに光を与えるような方向を取っていない。家庭―それはいわば人生の塞として、宗教的にも教育的にも、娯楽的にも経済的にも、家族員の要求を満たしていたものであったが。現代においてはそれらは家庭外において満たされ、家庭の役割は日に日に減少して来ている。人は、巨大な社会機構の中で分割して得て来た各々の断片をつぎ合わせ、自分を統一させ、全体性を回復しようという期待をもって家に帰って来る。しかしながら、家庭の中に残されているもの――愛情、血縁関係といった絆だけでは、それらのいわば、過度の期待に応じる事は出来ない。家庭の機能の減少と同時に増大して来るこうした危機は、誤った個人主義、工業の近代化、労働条件、さてはマス・コミの現象にも影響されて、益々深刻なものとなって来ている。

今一つの問題は、家庭における権威、秩序の問題であり、青少年が独立した特殊の文化――思想、生活様式、言語等を持ち、親達に対して独自の世界を持つ様になって来たという現象である。

世代のギャップという問題にしても、ただ親達を困惑させ、不安がらせている程度であれば未だしもであるが、それが、次第に社会がそのギャップを当然の事として受け入れ、その反抗的・非常識的な若い世代の表現や倫理やらを、一つの文化として肯定し始めている。

この様な一般社会における状勢を反映して教会も、①特殊化して宗教的機能のみを果す事で満足している、②教会が一つ体として結び合っているという「在るべき姿」に反して益々その内部においてグループ化、個別化し、グループ間相互の関係が失われ、又③「家族としての教会」という事は主張するが「教会としての家族」の在り方を助成する方向には動かない、否、むしろ教会活動に熱心であればある程、家庭を等閑にせざるを得ないような形での教会活動が強調される、といった現状である。

夏期キャンプを例にしてみても、むしろ若い世代の独立への要求を満たすようなプログラムは提供しても、今一歩先の段階に迄導く事を目的としたプログラムまでは準備していない。高校生男女の為のキャンププログラムが皆無の教区でその理由を訊ねると、余りに今の高校生は問題が多いのに、適当な指導者が少ないこと、教会外に沢山活動があって余り教会のプログラムには集って来ないから、という答えを聞かされた。プログラムを提供している教会があっても、その企画にどれほど教会教育的配慮がなされているか問題を感ぜしめる場合すらある。親達にしても、はっきりと、「夏の間の子供に対する責任から自由になりたい」という希望を、その他の希望（よい行儀作法や習慣を与えてほしいとか従順な生活訓練を与えてほしいという様な）にも増して表明している（註一）ことも見逃せない事実なのである。子供たちも、束縛されずに自分の好きな事が出来る、大人扱いしてもらえる、という事が参加の動機であるのだ

キリストを家庭へ

――教会キャンプのあり方の反省から――

中川朝江

ファミリー・キャンプ

夕もやの立ち始めた湖に薄紫のたき火の煙がただよい始め、パチパチ小枝のはぜる音と共に、ジュウジュウと景気のよい音を立てながらハンバーガーの焼けてゆく匂いやら、とうもろこしの香ばしい匂いがひろがり始める。

林の中のテーブルには子供達が摘んで来た草花が飾られ、草の葉のどびん敷やら木の枝のろうそく立ても並んで楽しい夕げの支度が進められてゆく。エプロンを掛けて忙しそうなハンバーガー係は御亭主組。テーブルの支度はお年寄組。母親達はキャビンで小さい子供達の世話をしているらしい、やがて賑やかな一連隊――青年達や大きい子供達が、空腹(すきっぱら)をかかえて帰って来る。どこで摘んで来たのか、袋一杯のブルーベリーやきいちごをお土産に。今夜はこれらがデザート・コースに登場し、宝探(スキャヴェンジャー・ハント)しの遠足の冒険談と共に食卓を賑わす事であろう。やがて合図の笛に全家族が集い、当番家族の司会のもとに、賑やかな夕食、リクリエーション、キャンプ・ファイア、礼拝と、夕べのプログラムが進められてゆく。それぞれのキャビンに家族が戻りその日の疲れをいやす頃、リーダー・キャビンには、牧師、各家族の代表、専門のキャンプ顧問が集い、反省と、明日のプログラムの相談にひとときを過すのである。

このような家族キャンプというものが、米国の教会において取り上げられ実施され出したのは比較的最近の事であり、そのプログラムやメンバーの構成は各教派、教会によって種々様々なものがある。一つの教会を単位として行われるものばかりでなく、一つの地域の中にある四つ位の教会が、共同のプロジェクトとして計画し、一教会から四家族位を出席させるやり方、或いは地域を問わず、一つのキャンプ場に集った色々な家族を一つのコミュニティとして迎えてやるもの、さては教派、信条の別を問わず、地域社会への奉仕を通して参加者の人生観と、相互の交わりを養い育ててゆこうとするワーク・キャンプやキャラバン等々、千差万別である。期間にしても三～四日のもの、一週間から十日のもの、或いは週末とか、日曜の午後から夜にかけてもの等色々である。期間が長く、構成員が複雑であればある程、全体の生活と各家族の生活のバランスが問題となって来るわけで、それが実際のプログラムの上で解決されてゆかなければならない。例えば、朝の食事と礼拝は家族を単位とし、午前中は、親達は協議会、子供達はリーダーと遠足や水泳に、午後は、父親達が男の子達を連れて魚釣りに行けば、母親のグループは女の子達と草木を材料にしての手芸をやり、夕食・リクリエーションと礼拝は全家族が集ってする、といったものが喜ばれる様である。その間、各家族が交替で炊事、子供の世話、進行等の責任を分担して他の家族をフリーにするとか、家族を単位とせずに、任意に個々が係について仕事を分担する等、色々なやり方が行われている。

においてとらえられるべき性質のものである。即ち、神より賜った愛の交わりというものが常に試され、或いは見失われ、或いは現実の破れの中に光を与える「るつぼ」としての家族というものが、現代の困難の中でありのままの姿と対決し、新しい交わりの可能性の中に生き始める場を得るという事はどんなに意味深い事であろうか。しかもそこには、共通の悩みを持つ他の家族があり、親は親、子は子で別れて客観的に問題を眺め、又それぞれの場に戻ってこの「新しい観方」を試し体験する事が出来得る。日常の、もう固着してしまった人間関係というものが、変化するのは、決して一方的変化で済むものではない。それは、関係しているすべての人にかかわって来るものであり、それだけに全く容易な事ではない。けれども、「新しく家族がまとめられる」という表現で語られる家族キャンプの収穫（註五）こそ、現代の家族が持ち得る最も貴重な経験ではないだろうか。家族を単位とした企画は、キャンプ生活のみでなく、特別のプログラムの下に行われる研修会（ラボラトリー）や協議会にも併行してとり入れられるようになって来ている。

家庭集会、或いは教会における成人科、両親のクラス、そしてそれらの中心にある礼拝自身において家族が一つとして捧げられるという事、それらはすべて、こうした激動の社会において家族がその意味をとり戻し、クリスチャン・ホームの意味を積極的に見出してゆこうとする試みであると云えよう。

私たちの問題として

日本の教会の現状を考える時、その問題の困難さと複雑さは想像外のものである。曰く、異教社会の背景、曰くクリスチャン・ホームの弱少さ、曰く一般社会における家族関係の変化、労働条件の困難等々到底このような「レジャー的」家庭キャンプ等望むべくもない現状である。だが、それが口実となり現状肯定であってよいのだろうか。プログラムは一見詳かくよく組んであっても、何も新しい味の無いキャンプ、「例年の如く」しているに過ぎないキャンプ。

もちろん、そうだからと云って、米国において行われているようなタイプの家族キャンプがそのまま実施出来る筈もないし、又その必要もない。むしろ日本の場合には、家族をも交えたキャンプであり、信徒の家庭が積極的に責任と、イニシアティヴを取る事によって、誰でもが遭遇している現代の家族の問題に対して、一つの答、一つの証をなす形で行われるであろう。そして又未信者の家庭も気楽に参加出来る様な雰囲気とプログラムによって、生活を通した伝道という事が、もっと積極的に計画され、行われてはどうだろうか。多いに研究の余地が残されている。

「青年をキリストへ」と云ったスローガンのもとに行われていたキャンプと、その理念も、今日ますますその必要性を増し加えてゆくであろう。しかしそれと併行して、「家庭をキリストへ」「キリストを家庭に」という考え方をバック・ボーンとしたキャンプ、集会、そして教会生活というものが次第に養い育ててゆかれ、意義深い家族キャンプが各地で開かれてゆく事を心から祈るものである。

註一　増田健三著「キャンピング」YMCA青年指導叢書、昭和二九年発行、五頁。データはカナダ・キャンプアーメックのもの。

註二　スイスにおけるキャンプの役割について云われた事。「教会教育誌」（61号13頁）

註三　Riecken, Henry W. The Volunteer work Camp : a Psychological Evaluation(Cambridge, Addison-Wesley Preess,)

註四　クルト・レヴィンを始めとした集団（グループ）力学（ダイナミック）の研究者達は、個・グループ・社会等この変化に関する理論を、次々に実験しては公表して来ている。

註五　Schlingman, E. L., "Family Camping," Intevnational Journal of Relzions Education., Nov., 1956. p. 13

から、極めて問題であるわけである。しかも若いキャンプ・カウンセラー（中学キャンプに高校生、高校キャンプに大学生）が、準備訓練を受けずにリードする場合、人気取りのリーダーシップをとる事は強い誘惑である。その結果、「楽しい経験」が最善のエヴァリュエーションの規準となり、むしろ教会教育にとって〃かき入れ時〃であり、「教会の将来はキャンプにある」とまで云わしめる（註二）程重要なキャンプ生活が、適当にお茶を濁されてしまっている事が多々あるのである。

根底となる教育目標

ちょっと手きびしい批評を下してしまったが、ここで、実践面のみでなく、深い指導原理に基いて非常に組織的・建設的且つ研究的に、高校生・大学生・家族を対象としたワーク・キャンプを行っているフレンド派のゆき方を学んで見たいと思う。

一九二二年頃、西ヴァージニア地方の鉱山地帯で給食キャンプを始めた事が現在のワーク・キャンプの発端になっているようだが、広く全世界にその組織を持ち、貧困や人種偏見の中心地にキャンプーを送り、労働そのものよりも、それを通して平和問題、人種問題、経済問題等に対する態度を養わせ、礼拝と交わり、研究と労働の生活の中にキャンパーの成長を図るというその行き方には極めて注目すべきものがある。即ち、ここでは、態度の変化、観点の変化という事が根本の目標になっているのであって、その為に、準備と、参加者が各現場に帰って行った時、どの様にそこにある問題と対決してゆけるかという、フアロー・アップの問題が、キャンプと同様のウエイトをもって考えられている。ここで参考になると思われるのは、ワーク・キャンプによって影響を受けると考えられる四つの「参加者のニード」の一つ、「自律性」に関する研究である。即ち、キャンパー（高校生と大学生）が参加前に表わすものは、親達の権威に対する、反抗的、攻撃的な自律性への欲求であるが、キャンプの期間中（通常八週間。その他週末のみのもの等々あるが）にその権威の対象が変えられ、一般社会における慣習、偏見等が対象となって来て、それらを打破し、自分自身もそれから自由になるという事が単なる反抗よりも重要な事と考えられて来るのである。もちろん、自由を束縛する対象としての両親の位置が消失してしまうのではないが、それが持っていた意味が変って来るのである。（註三）同様に、人間関係においての考え方、職業、人生の意義、宗教、さては世界観に至る迄、より成長した広い視野と、問題意識、洞察力、そして積極的なアプローチというものが生み出されて来るのである。この様な教育法の根底にあるものがフレンド派の信条である、と云ってしまえばそれだけかも知れないが、問題は、もっと一般的なものなのである。即ち或る問題に対して常に根本的な対決の仕方をし、変化が望まれる場合には、変化する事が出来る様な自由な、又暖かい空気を作り、更にその変化が続いて自己の内部に成長してゆけるようサポートを与え続ける、といった事でそれこそ最近社会心理学者達の間でも問題にされている「変革」の理念（註四）の実践に他ならない。

こうした点から反省させられるのは教会において通常行われているキャンプの無目標性無計画性という事である。先程から問題にして来た家族の問題、世代の問題にしても、根本の観方の変化、態度の変容、現場への適用といった目標をふまえて取り扱われない限り解決への道は無い問題であるのに、なかなかそこ迄は考えられていないのが一般であろう。こうした意味において、今問題になって来ている教会の家族キャンプという新しいアプローチが非常に注目されて来るのである。それはただ、ふだんキャンプ生活を味えない母親達や、家庭にいる事の少ない父親達に愉快な戸外の共同生活を味ってもらうといったことからだけではなく、もっと積極的な意味

熊本で伝道しているうちにある日、本妙寺の参道に座って物乞いしている癩患者の悲惨な姿を見ました。その時主イエスの第二のお示しをうけたのです。熊本に日本最初の癩療養所を開設し、わが国の救癩事業のさきがけとして全生涯を癩者のために献げました。

貴族の一人娘であったハンナ・リデルさんには、この世の幸福を約束される道は、いくつもありました。けれど他のすべてのことをうち捨てて主イエスさまのお示しに従いました。

人間にとって一番尊いことは、自分の考えをすてて神さまのお示しに従うということです。

大和田　功

―― 七月九日 ――

クリスチャンの新しい生活

聖書　キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。　ロマ六・四

聖書のヨハネ黙示録第七章には、天国に住む人は「白い衣」を身につけているように書いてあります。わたしたちすべての人間は真黒な罪の衣を身につけているので、そのままでは天国にはいることが許されません。主イエスさまは御自分の真白な「義のはれ着」をわたしたちに下さって、私たちの真黒な罪をご自分で着て、十字架の上で死んで下さった救い主であります。

預言者エレミヤは、この真黒な罪はたといソーダを用いても、多くの灰汁を用いても洗いおとすことはできないといいました。

しかし預言者イザヤは、「たといその罪は緋のようであっても、雪のように白くなる」、といっています。これはイエスさまを信じる人がその十字架によってきよめられることをいっているのです。

イエスさまを信じる人はバプテスマ（洗礼）をうけてクリスチャンになります。洗礼によって罪のけがれが、あらいきよめられて、生れかわるのです。

「生れかわる」というのは、イエスさまがニコデモにお話なさいましたように、聖霊の神さまの力でしていただくのであって、目に見える体がもう一度生れかわることではありません。心の生活が全く新しくされることです。「新しいいのちに生きる」というみことばは、そのことをいっているのであります。

「すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する……古い人を脱ぎすて、心の深みまで新たにされて、……新しい人を着るべきである」（エペソ四・二二―二四）

バプテスマをうけてクリスチャンになる人の生活は、心のそこまで新しくなることが大切なことです。

「新」という漢字は支那のはじめの字は「亲」（はしばみ）という、実のならない何のやくにもたたない木を、「斤」（おの）ですっかり切ってしまう、という字で、そのあとに、よい実のなる新しい木ができるという意味だそうです。

神さまに従わない古い私は捨てて、神さまの下さった救い主イエスさまを信じイエスさまに従い新しい人になりましょう。

田坂惇巳

―― 七月一六日 ――

豊かにしてくださるイエスさま

聖書　主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ、主のあかしは確であって、無学なものを賢くする。　詩一九・七―一四

マルコ八・一―一九

児童説教

信仰生活への前進

——七月——



先月につづいて、今月は三位一体の期節で、特にとりたてるような期節的な行事はない。この期節は、イエスの教訓、譬え話、信仰生活等について学ぶことになっているが、テキストをよく調べてみると、かなり系統的に配列されていて、内容的に順を追って発展していることがわかる。

六月には、ペンテコステのあと、三位一体節のはじめに、悔い改めについて学んできた。悔い改めは、信仰生活の第一歩として、はぶくことのできないものであることは明らかである。毎日曜日の礼拝においても、罪の告白——ざんげ——は、まっさきになくてはならないものだ。

さてその悔い改めた者は、どうなるであろうか。神は自分の罪や無力を知って、神の前に告白した者を、キリスト者として召し、新しく生まれかわった者としての信仰生活をなさせたもう。今月はそうしたことを中心にして、神の召命から、キリスト者の信仰の戦いや忠実を学ぶことになっている。

夏はたしかに生活の季節であって、その点も合致している。

——七月二日——

主イエスに従う

聖書　いっさいをすてて、イエスに従った　ルカ五・一——一一

ゲネサレの湖には、さわやかな朝風が吹いていました。そのそよ風に乗って主イエスさまのお声が湖上から岸に集っていた群集の耳にひびいて来ました。

お説教が終ったあと、主イエスさまはシモンに「沖へ漕ぎ出し網をおろして漁をしてみなさい」とおっしゃいました。シモンは「先生わたしたちは夜通し働きましたが何もとれませんでした。しかしお言葉ですから網をおろしてみましょう」とお答えしました。

シモンは心の中で「私たちは漁にかけては専門家だ、その私たちが一晩中網を打って見たが一尾の漁もなかったのだ、それだのに……」と考えました。しかしシモンは何かしら主イエスさまのお言葉には従わねばならない気持になり、漁については半信半疑でしたが網を打って見ました。ところが意外な事が起ったのです。

シモンはおびただしい魚の群が網に一ぱいになっているのを見た時、稲妻が光るときのように瞬間的に、この主イエスと言うお方はただの預言者ではないと感じました。そして先程まで主イエスさまのお言葉を半ば疑っていた自分は何と言う愚かな、不信仰な者であったかと云う事に気づいて深く悔みました。そしてこの時からシモンはすべてを捨てて主イエスさまにお従いする人になったのです。

英国の貴族の一人娘であったハンナ・リデルは「日本に福音を伝えよ」との主イエスのお示しに従って明治二十二年に日本に来られました。

わたしたちはこうして教会に来て、イエスさまの父である神さまを礼拝し、神のみ心にそった生活をしようとしていますが、わたしたちのまわりには、いろいろな宗教があり、いろいろなものを神だと思っておがんでいる人たちがいます。よほど注意しなければ、神さまがいくにんもいて、しかもみな同じように思えてしまう危険があります。

「主よ、主よ」と、ほんとうの神さまを呼んでいると思いながら実は、まことの神さまのことなど考えていないということがあるのです。エジプトを脱出してきたイスラエルの人々は、モーセがシナイ山へ登ったままおりてこないので、アロンに頼んで金の子牛をつくってもらいました。そして、この金の子牛の偶像が、わたしたちをエジプトから救い出してくださった神さまだと言いました。

神さまのみ心を聞いて行おうとするのでなくて、わたしたちの願いがかなえられることばかり考えますと、まことの神さまがぼやけてしまいます。ほとけさまでも、おいなりさまでも、犬神さまでも、だれでもいいことになってしまいますよ。

生原　優

七月三〇日

試錬とのがれる道

聖書　神は真実である。あなたがたを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。

コリントI　一〇・一三

むかしモーセは、エジプトで苦しんでいた何百万のユダヤ人を引きつれて、ふるさとの国ユダヤに向いました。遠い母国まで、こんなに大ぜいの人たちをみちびいて無事に行き着くことができるかしらと、はじめモーセは心配でした。神さまは「お前が自分でするのではない。私がお前にさせるのだ。」といわれたので、モーセはすっかり元気づき、勇気を出してこのむずかしい大きな集団旅行の団長さんになったのでした。

さて、いざ出発してみると、思いがけない大へんな苦しみに何度もぶつかりました。ある時は、エジプト軍に後ろから追いつめられて、紅海という海の波うちぎわに動けなくなった時、モーセは神さまに祈り、お助けを願ったところ、海が二つに分れてエジプト軍の襲撃を逃れる道を備えられました。またある時は、すっかり食べ物が無くなって、みんなが空腹で苦しんでいる時、神さまは朝露のように静かに旅人たちの上にマナという食べ物を降らせて、空腹をみたして元気を回復させて下さいました。

ほかにもまだまだたくさんの苦しみがありましたが、いつも神さまは最後にのがれる道を用意して下さいました。そして四〇年もかかって、とうとう母国の土をふむことが出来たのでした。その間、モーセはどんなことが起っても神さまを信頼して、びくともいたしませんでした。またユダヤ人たちも苦しみに負けそうになったこともありましたが、よくがまんしてがんばりました。これが、この大旅行を成功させた原因だったのです。

「試錬」というのは、私たちがもっと神さまの強い子になるように、神さまが私たちに与えられる苦しみです。私たちをただいぢめるために与える苦しみではないのです。苦しいこと、いやなこと、悲しいことが、もし私たちの心の中にあれば、それが神さまの子が受けるにふさわしい苦しみかどうか、よく考えてみて下さい。モーセのように、神さまの子の苦しみは、神さまを信頼し、よくがまんすることによって、きっと神さまがすばらしいのがれる道を備えて下さるにちがいありません。

遠山隆夫

自分は力も弱いし、頭も悪いし、勉強もできないから役にたたない人間だとあきらめている人はいないですか。また自分のことはそう思っていなくても、誰れかお友達をそんな目で見ていることはありませんか。

イエスさまのまわりには、いつもイエスさまのお話を聞きたがって大ぜいの人たちが集っていました。その中でも、特に熱心な人々は家に帰らないで、イエスさまと一緒に野原にねたりして少しでも多くの話を聞こうといたしました。また遠くの町からはるばるやって来た人たちもいました。イエスさまは、この人たちが、かなり疲れているのをごらんになり気の毒に思われました。皆、イエスさまのお話に夢中になって、おなかのすいているのも忘れているからです。この人たちは、これから家に帰るとしても、きっと途中でおなかがすいて倒れてしまうことでしょう。イエスさまは、お弟子を呼んで「食事をさせてやりなさい。」と云われました。しかしそこは人里はなれた荒野で、人の住んでいるところではありません。パンを買いに行くのにもお店がないのです。お弟子さんたちは、すっかりまごついてしまいました。するとイエスさまは「今、あなたがたはいくつパンを持っていますか。」とお尋ねになりました。「七つしかありません」。とてもこれでは四千人の人にあげるわけにはいかないのになアーと、お弟子さんたちは心の中で思いました。

イエスさまは、そのわずかなパンを取って神さまに感謝し、ちぎってお弟子さんたちにわけながら、皆にくばりなさいとおっしゃいました。ところが、あんなにわずかだったパンなのに四千人もの人たちは、おなかがいっぱいになる程に食べることができたのです。どうしてこんな不思議なことが起きたのでしょうか。このことでお弟子さんたちには、イエスさまは、どんなことでもでおきになるお方であり、その手をふれられると、どのように貧しいものでも豊かなものに変えられるのだということを知りました。

自分はつまらない人だと考えている人は、もう一度、このことを考えてみましょう。弱かったり、貧しかったり、美しくなかったりしてみんなから馬鹿にされても、イエスさまにお捧げすれば、すばらしいものにと変えてくださいます。あきらめないで、この自分をイエスさまのものとしていただきましょう。

作道至示

七月二三日

まことの神

聖書　**わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。**　マタイ七・二一

わたしが前にいた教会に、純一君という、目のくりくりした、りこうそうでかわいい子がいました。幼稚園の赤組さんでしたから、あの頃、四つだったでしょう。お母さんが教会へ来ていらっしゃいましたので、純一君もよく礼拝にいっしょに出席しました。

ある日曜日の朝、礼拝の時間になって、私が講壇の方へ歩いていきますと、「アッぼんさんがきたーっ」て、大きな声で言うのが聞こえました。せっかくみなシーンとしていた時だったので、私もちょっと、こまったと思いました。純一君でした。純一君には、黒いガウンを着たキリスト教の牧師さんも、お寺の坊さんも、同じに見えたのでしょう。

純一君は教会の幼稚園へ来ても、よく石ころを積みあげて、いぬがみさまごっこをして遊びました。お家の近くに、小さな小屋があって、そこには赤い小さな鳥居があり、犬神さまといって、大人でおまいりする人があり、子供は遊び場にしていたのです。

ではないが、ユダヤ教の教育によって養われ、信仰の問題についても素朴ではあったが一応の理解があり、忠実な信仰生活をおくっていたものであろうことは、容易に考えられる。

シモンはだから信仰の面においては、一般の人々と同じ位の程度であったので、別にどうということもなかったが、仕事の面では、かなり腕のいい漁師であったらしい。その証拠には、一群の網を洗っていた漁師たちの親方らしくふるまっているし、イエスが、沖にこぎ出して、網を下ろして漁をしてみなさい」といわれた時にも、一応自分の昨夜来の体験を述べた上で、みんなを指揮して、いわれた通りに網を下ろすことに自信を持ち、そのことによって生計をたて、生活のすべてをそれにかけていた。もし網を取り上げられたら、明日からの生計をたてることができないだろう。

シモンは、網を洗いながら、舟の上から人々に話をしておられたイエスの言葉をきいていたのかも知れない。またイエスが話しかけられた時、その日、その言葉、その権威ある態度が、シモンをすっかり捕えてしまったのかも知れない。とにかくシモンは、イエスが「網を下ろして漁をしてみなさい」と言われた時、自分が専門家である誇りも忘れて、「お言葉ですから、網をおろしてみましょう」と、進んでみ言葉に聞き従い、これを実行した。

その結果は、聖書にしるされている通りである。

信仰は驚きや恐れが、大きな戸口になるものである。原始人たちは、風を恐れ、かみなりを恐れ、火を恐れ、その不思議に驚いていろいろの神を作って、これを拝んだ。日本の八百万の神さまも、そんなものである。

シモン・ペテロは、イエスの不思議な力に驚き恐れた。しかし彼はすぐにそれに手を合わせて拝むようなことをしなかった。彼は「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と言ってひれふした。ペテロはイエスの前に出て、まず自分の罪を深く悔い、自分の弱さ、たりなさを知った。

その時、イエスは、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」といわれた。イエスの召命は悔い改めたペテロに来た。彼は網を捨て——つまり全生活をすてて、ただイエスの弟子として、新しい生活にはいった。そして彼は、最も大いなる弟子になった。ここに信仰生活への秘訣がかくされている。

—三一節第六主日　七月九日—

悔い改めた者の信仰生活

主日の趣旨　悔い改めてキリストの召を受け、キリストに従う者の生活は、同じ社会生活を営んでも、キリスト信仰のない人々の生活とは、違ったものである筈である。今日の日課では、クリスチャンは、どうしても「信仰生活」つまり「信仰をもった社会的実践」を行わねばならないということと、その方法はどういうものであるかについて学ぶことになっている。

ここでは山上の垂訓にあるいくつかの教えが、そのテキストに選ばれている。

主題「信仰の実践」

使徒書　ローマ　六・三—一一
福音書　マタイ　五・二〇—二六

祈り　すべてのよいものをつくり、与えたもう全能の神さま、どう

礼拝説教



三一節第五主日

主の召命について

七月二日

主日の趣旨　前の主日には、悔い改めた者の生活はけんそんで忍耐深くなければならないし、神のめぐみにあずかっている者として、いつもはげみ、積極的な信仰生活の実践を進めて行かなければならないことを学んだが、今日は更にそれを前進させるために、召命を受け、全生活を主のために捧げつくして行くべきことを学ぶ。

主題「み言葉に聞き従う」

使徒書　第一ペテロ　三・八—一五
福音書　ルカ　五・一—一一

祈り　神さま、あなたはあなたを愛し、従う者に、人の思いを越えたよきものを備えたまいます。どうぞ、わたしの心に、あなたを愛する愛を注ぎ、すべてのものよりもあなたを愛させ、わたしたちの望み得るあらゆるものにもまさるあなたの約束を、得させてください。世に限りなく生きておおさめになるみ子、わたしたちの主イエス・キリストによってお祈りします。

アーメン

説教

人間が神の召しを受け、信仰生活に飛びこんで行く場合、人それぞれに色々の違いがある。ある人は人間問題を探究し、哲学を学び思想学の文章によって、ほん然と信仰生活にはいる。

ある人は、長い病床にあって苦しみ、生命の不安に直面して神を求め、神にすがって信仰生活にはいる。

ある人は、仕事に失敗し、失意のどん底にたたきこまれて、はじめて心の目が開かれ、神を信ずるようになる。

ある人は、何となく友達にさそわれて教会に出入りし、そのうちにすすめられるままに洗礼を受けて、思いがけない魂の喜びにひたる。

ある人は、家庭がクリスチャン・ホームで、気がついたら幼児洗礼を受けていて、いつとはなしに、ベルトコンベヤに運ばれるようにして信仰生活をつづけている。

それこそこれは千差万別であって、他の人のことは、むしろあまり参考にはならない位である。しかしただここに共通のことがある。それは、神の召しと、そのみ言葉を聞き、これに従う悔い改めたけんそんな態度である。

シモン・ペテロの場合も、思いがけないできごとであった。

シモン・ペテロは、ゲネサレ湖で魚をとって生計をたてていた漁師であった。恐らく貧しい暮しであったに違いない。この出来事がある前に、彼はどれだけイエスとの間に交渉があったかは、明らか

物でない。ヤコブの言う通りだ。そこでイエスは、人間同志の生活で、他の人をののしったりばかにしたりしてはいけない。他の人々と、いつも和解しなければならない、そしてあなたがたの義は、パリサイ人の義にまさっていなければならない、と、実際問題を例示して、こんこんと教えられた。

信仰は神の与えたもうものであるが、倫理的な外面的生活は、信仰の生み出す実であると同時に、そこにはこれを育て、肥やしをやり、皮をつみ、消毒薬をかけ、紙袋をかけるというような、人間の努力や修養か必要有効である。信仰がなくても、善行をすることは出来るが、これは芝居の役者の演技のようなものであろう。

三一節第七主日

聖　化

七月一六日

主日の趣旨　聖化というのは、たいへんむつかしいように受け取られるが、これは、信ずる者が、罪から解放されて義の僕となることであって、宣義とうらはらのものであろう。そこで今日のテキストでは、七つのパンと少しの魚で四千人が養われた奇跡が扱われている。これは、聖化されるためには、主に教えられ、主に養われることが必要な条件であることを教えたものである。

主題「**主に養われる**」

使徒書　**ローマ**　六・一九―二三
福音書　**マルコ**　八・　一―　九

祈り　まったき摂理をもって、天と地と、その中のすべてのことをすべたもう神さま、ねがわくはすべて害あるものをわたしどもから取り去り、益あるものをお与え下さい。世に限りなく生きておおさめになるみ子、わたしたちの主イエス・キリストによってお祈りします。　アーメン

説　教

ある人々は、食物は人間の営々辛苦のたまものであって、働いたものは当然食う権利がある。感謝するなら、太陽のめぐみを感謝するか、百姓の苦労に対して感謝すればいい、と主張する。

しかしキリストは、主の祈りで「日ごとの糧を、きょうも与えたまえ」と祈ることを教えられた。もちろん祈らなくても、食糧は与えられている。神は人間が生きるために必要な食物をそなえていて下さる。しかし神はなんのために食物を与えたもうのであろうか。この「日々の糧」という言葉の原語は、ローマの兵隊が持っていた弁当や給食を指す言葉だそうである。兵隊の食物は、兵隊が戦闘に参加してその任務を十分に果すことのできるだけのカロリーを持っている。

昔、イスラエルがアラビヤの荒野をモーセに導かれてさ迷っていた時、食物がなくなったので神はマナを与えられた。マナは保存がきかず、毎朝これを拾って、その日一日だけの食糧にあてなければならなかった。神はモーセによって契約の地に導くことを約束され、イスラエルはその約束を信じて荒野の旅を導かれていたので、その約束を果すために、マナをもって養われたのであった。

だから、日々の糧を与えたまえと祈り言葉の中には、神のめぐみを信じ、神の与えたもう食物を頂くだけでなく、それによって生活力を与えられて、神のみ旨を地上において行い、信仰生活の実践を続けて行く決意がひめられている。

かわたしどもの心に、あなたのみ名を愛する愛を与え、まことの信仰を増し、よきものをもって養い、大いなる憐れみをもってわたしどもを変わることなくお守り下さい。世に限りなく生きておおさめになるみ子、われらの主イエス・キリストによって。　　アーメン

説　教

世間で立派な人間、聖人君子、といわれるような人々がいる。人に迷惑はかけない。気の毒な人や弱い人には親切にしてやる。人と言い争ったり、憎まれ口をきいたりしない。すべての人々に思いやりがあり、自分の立場や責任をちゃんと知っている。人間としてこれはもち論大切であって、信者であってもなくても、これは人間の教養として、その人の品性をつくるものとして、だれでも努力しなければならない。

クリスチャンであっても、短気でおこりっぽい人がいるし、クリスチャンでなくても、おだやかでだれにでも愛せられる人物がいる。こうしたことは、その人の努力や修養で、どうにでもなるものであって、いつにその人の努力いかんにかかっている。

イエスの時代、多くのユダヤ人は、いっしょうけんめいに、修養に努力していた。その土台はモーセの律法で、律法に教えられていることを立派に守りさえすればよい、と教えられていたからである。そこで、あるまじめな人々の中には、人格者として尊敬できるような人が多くいたが、あるものは表面だけでも努力しているように見せかけておけばそれでいいのだという訳で、二重人格者のように裏表のある人間になっていた。

イエスは、そうした人々を攻撃せられた。ていさいをつくろっているが、心の中はどうにもなっていないではないか。外側も大切であるが、もっと大切なのは話だ、良心だとして、心が新しく生まれかわるべきことを教えられ、神の義を行うものでなければならないことを示された。

人間同志の義なら、人に迷惑をかけないで、相手の人に尊敬されるだけですむが、イエスの教えられた義は神の義であった。この義は、ギリシャ語ではディカイオスネといって、神の目から見る正義ということを意味していた。人間の目はごまかせても、神の目をごまかすわけには行かない。神の目は人間の表面的な行為よりも、その心の隅々にまで及ぶもので、心の源泉が問題となる。

人を殺さない、という行為がある。Aの人は心の中で、あいつは憎らしいやつで殺してやりたいと思っているが、殺してはいけないと教えられているし、殺したら警察につかまるから殺さない。ところがは、神の愛によって生まれかわって、心の底から神のめぐみにはげまされているから、愛すなといわれても、人に親切にせずにはいられない。したがって人を殺さない。だから、人を殺さないということだけで、その人を判断してはいけないので、重要な点は、その人の心が、愛に生かされているかどうかである。

戦争をしない、平和をすすめる、というだけではいけない。心から平和を愛し、神の愛を地上で実践して行く心が大切なのだ。イエスが問題にされたのは、悔い改めて、新しく生まれかわった者が、心の底から信仰を実践して行くことであった。信仰は心の中だけでなく、社会の中にあって、積極的に立派な言行一致、信仰と行動の一致に推進して行くべきなのである。

イエスは信仰生活の実践にあたって、そこに生活行為の努力の必要を教えられた。表面に出る生活は、二次的なものであるが、しかし、信仰が生活に表われてくるようでなければ、その信仰はまだ本

祈り 主よ、どうかわたしどもが正しいことをいつも考え、これを行う心を与えられますように。そしてあなたによらなければ何一つよい事を行うことのできないわたしどもが、あなたにより、み心に従って生きて行けるようにして下さい。世に限りなく生きておおさめになるみ子、わたしたちの主イエス・キリストによってお祈りします。　アーメン

説教

人間ドックというのがある。一、二週間入院して、からだをめんみつに調べてもらう。医者ならなんでもわかるというものでもないので、その病院の各科の専門医が、自分の担当している分野をしらべる。そうすると、自分にも気がつかなかった色々の病気が、早期に発見されるので、早めに治療をすることができる。これは健康管理のためには、最良の方法である。病気がいよいよ悪るくなってくると、あわてて医者を迎えるのが普通だが、よく気をつけておれば、もっと早くその徴候を知ることができて、適当な処置をすることができる。

魂の生活である信仰生活にも、油断をすると病気がはいりこんできて、気がついた時には、すっかり悪魔の手中におちいっていて、どうにも手のほどこしようがないようになっていることがある。たとえば、信仰と独善（ひとりよがり）は、親類のような関係にある。信仰を自分だけのもののように考えて、自分の意見や主張を最善のものとし、自分の考えに反する者は正しくないのだといってこれを退けようとする。ドグマという英語の言葉には、信仰の教理という意味と、独断という意味の二つがある。わたしたちの信仰という場合には、神にすべての権威と真理があるので、それが自分にあるのだと考えるようになると、独断になってしまう。

ここに、良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはない、という言葉がある。これは極めて自然の状態であって、わかり切ったことである。しかしわざわざこうしてキリストがこのわかり切ったことを言っておられるというのは、そこに問題があるからで、信仰の問題や人間の心の問題では、この二つがしばしば別々になっているからである。

童話の「赤ずきん」にあるような、おおかみがおとなしそうに化けているような姿が、うっかりすると出てくるのだ。

パリサイ人がそうであった。彼らは外面に出ることだけを問題にして、口先きは、主よ、主よ、といかにも敬虔な人のようにふるまう。しかしすることとさえしていればそれでいいものだろうか。イエスは、パリサイが表面だけはうまくつくろっているが、心の中ではけっして表面にあらわれている通りではない。パリサイ人は、自分ではいいつもりでいたかも知れないが、イエスの目からみると、すきまだらけであった。彼らは人のことを批判して悪口をいい、自分だけは立派な人間だと誇りにしていた。これはもうすでにその人の心の中に傲慢と自尊心がはびこっている徴候である。神を忘れて、自分の考えや判断が正しいとして、他の人々に押しつける、独断主義におちいっているしるしだ。そこでイエスは、そんな人は、白く塗られた墓のようなもので、中は人骨でうずまっていることを教えられた。

問題は、植物の場合には、ごく自然にそのまま、良い木から良い実が、悪い木から悪い実が出てくるのだが、人間の場合には、作為的にこれをある程度それらしく変えて見せることができることだ。立派なクリスチャンらしく、けんそんを説き、愛のわざを行い、平和を主張する。そうすると、それだけで、自分も他人も、見誤って

イエスは三日間も群集とともに野外で生活し、彼らの信仰を指導せられた。その数は四千人であったらしい。たいへんな数であるが彼らは熱心にイエスの話を聞き、イエスに従うことを学んでいた。聖書の記事を見ると、四千人の人々が空腹をイエスのもとに行って訴えたわけでなくて、つまり寝食を忘れて、イエスのもとに熱心に集っていたようである。群集の空腹に気づき、そのことを心配して「もし彼らを空腹のまま家に帰らせるなら、途中で弱り切ってしまうであろう。それに、なかには遠くからきている者もある」という温かい配慮までせられたのは、イエスであった。神はいつまでわたしたちが祈り求める先にすべてのことをご存知であり、その備えをしていて下さる。それでもなおかつわたしたちが祈り求めなければならないのは、そこに神のみ旨が秘められており、わたしたちにはその旨を実践すべき大きな使命があり、その使命を果して行くためには、与えられるのを待つのではなくて、積極的に求めることに重要な意味があるからである。

イエスは四千人の群集のために、七つのパンと少しの魚を前に置き、「神に感謝してこれをさき、人々に配るように命じられた。」すると、そのわずかの食物によって、四千人の群集が満腹しただけでなく、その残ったパンくずが、七つのかごにいっぱいになった、とマルコは記録している。

ここで注目すべきことは、七つのパンで四千人が満腹したということよりも、一、群集の求める先きに、キリストの愛の配慮があったこと。二、群集を整然とそこに座らせて、秩序を置きたもうたこと。三、それがわずかな食物であったにかかわらず、神の感謝し、祝福せられたこと、であろう。

神によって食物を与えられるというのは、満腹を感謝するのでなくて、それによって神の愛を知り、神のめぐみを受け、神のみ旨を遂行して行くだけの力を受けることである。それは、霊的に空腹な状態にある者、悔い改めて新しく生きようとしている者、神の約束する者に、豊かに与えられる。

わたしたちは、聖化されなければならない。きよめられなければならない。そのためには、何もかもすっかりなげすてて、からっぽになって、神の糧の食物によって養われなければならない。夏の日照りにしおれた草花が、水をやるとしゃんとするように、私たちも飢えかわいた心をもっと神のみ言葉をゆたかに受け、十字架のめぐみに浴する時、うんと元気になり、聖化されるのである。

三一節第八主日

異端の危険

七月二三日

主日の趣旨　信仰生活をつづけていくと、色々の障害にぶつかるが、その中の大きなものの一つは案外わたしたちのうち側にある異端であり、にせ預言者のいつわりの教えである。口先きだけのキリスト教、理屈だけの信仰、学問や知識として受取るキリスト教の教え、それらは、いずれも危険きわまりないものである。何が正しくて、何がまちがっているか、それをはっきり見わける目が、大いに必要である。

主題「良い実を結ぶこと」

使徒書　ローマ八・一二－一七
福音書　マタイ七・一五－二三

この家令は、失職しそうだということがわかって、自分の将来のことをまじめに考えてみなければならない状態に追いこまれた。社会生活をして行く以上、経済問題、生活問題は、最も切実な問題として、わたしたちに迫ってくるものである。

「どうしようか。主人がわたしの職を取り上げようとしている。土を掘るには力がないし、物ごいするのは恥しい」という思案をしている。もしこの家令がほんとうに悪人なら、いくらでもお金を悪いことのために利用できたはずである。しかし彼は、土方をしようか、乞食をしようか、とまで考えたが、これは決して彼が悪人ではなくて、どん底の生活にまで落ちて、しかたがないとまで覚悟した程の、むしろ正直な人であったことの証拠ではあるまいか。

彼はお金の偉力を十分に知っていたし、同時にその力の限界も知っていたようだ。つまり富というものは、人間が利用することによって価値があるものであって、その価値は利用する人によって、またその目的によって、色々と変わるものである。そして富や金そのものは人間の生きている間だけしか価値がないもので、神のまえには、何の値うちもない。また人間がお金や富におぼれ、これに仕えるようになると、悪魔のような悪の力すら発揮するものである。お金が頼みにならないとすれば、どうしたらよいのか。

この家令は、負債者を呼び出して、それぞれの負債を軽減してやった。「油百樽」のものは五〇樽に、麦百石のものは八〇石に、というように、五割、二割という、思い切った処置をしてやった。これはごまかしをしたのではなくて、彼にゆるされている権限内の裁量でできることであった。

免債をまけてもらった人々は、どのように感謝したことであろう。彼らは家令の親切心に心を打たれ、深い友情を持ったことは、当然考えられることである。始めに家令が心の中で予想していた通りであった。

金というものは、「天下のまわりもの」というが、これはたしかに役立てて用いるために神から託された賜の一つであろう。

スチュワードシップという言葉がある。これは、わたしたち人間はこの世に生をうけているが、この世のものはすべて神から委託された賜であって、富も学問も、才能も生命も、すべて神のみ旨のままに生きて行くために用いなければならない。つまり賜を預けられた家令であって、その賜を自分のために用いるのではなくて、神のご用のために捧げ、役立てて行くことをさしている言葉である。

人間社会においても物質やお金よりも親子の愛や友情の方が大切であり、この不正な家令も友情の価値を知って、これを得た。しかしもっと大切なことは、神の愛と神を信ずる信仰であって、そのためには、わたしたちはすべてを投げ出しても悔いることはない。神から託されているこの世の一切のものを、どのように用いるか、それによってわたしたちの生涯が決定されるのである。（青山四郎）

表紙のシンボルの説明

神の手

詩篇九八・一―二の「主の右の手と聖なる腕とは、おのれのために勝利を得られた。主はその勝利を知らせ……」とあるみことばによって作られたシンボルである。ある場合には、親指と人さし指、中指の三本だけであらわすこともある。詩篇一三九・一〇に「あなたのみ手は、そのところで私をみちびき、あなたの右の手は、私をささえられます。」のように、雲の中から下にのばされた手の時もある。どの場合も、指のうしろに光背がえがかれるが、これは神性をあらわすものである。

しまって、その人間の心も立派なものだと思いこむ。けれども、その人の心の中はいったいどうなのであろう。その人の心が、キリストによって新しく生まれ変っていなければ、どんなに上手に表面をつくろっていても、やがて馬脚をあらわすであろう。

つまり実は作るものでなく、ひとりでに実るものである。表面的なことに努力することも大切だが、一番大切なことは、その木そのもの、心の中を良いものにすることだ。

わたしたちは、自分の話を、ときどき「ドック」に入れる必要がある。それは偉大な医者であるイエスの前に出て、聖書の言葉のメスによって、心のすみずみまで調べてみることだ。信仰者らしく見えてもだめ。口先だけの信仰もだめ頭の中だけの信仰もだめ。キリストの福音が、生活の原動力となって、そこから実が生まれてくるのでなければならない。

忠実について

三一節第九主日　七月三〇日

主日の趣旨　信仰生活では、忠実ということが、大切である。今日のテキストでは、不正な家令のたとえ話が取り上げられている。これは今日の常識からは、ちょっと理解しにくい点もあるけれど、その主旨は、忠実というものの本質と、そのことは、与えられた賜の忠実な使用につきることが教えられている。これは人間社会の忠実ということよりも、神への忠実を中心にして学ぶ必要がある。

主題「富と友情」

使徒書　第一コリント　一〇・六―一三
福音書　ルカ　一六・一―九

祈り　主よ、あなたのいやしいしもべらの祈りに、憐み深い耳を傾けて下さい。またわたしどもの願うところのものを得るために、み心にかなう願いをさせて下さい。世に限りなく生きておおさめになるわたしたちの主イエス・キリストによって、お祈りします。　アーメン

説教

このたとえ話は、聖書の中でもむつかしいところで、取り扱いに苦心をするが、気をつけて読んでみると、不正な家令をイエスがほめておられる場合、家令の不正を認めて、それをほめておられるのではなくて、この家令がたくされた富を上手に用いて、人生における最も尊い信頼、友情というものをつかんでいることをほめておられることがわかる。

この家令が、主人の財産を浪費したことは、悪い事に使ったのではないとしても、もちろんほめたことではない。問題は彼の失職ということであって、浪費したことは、彼の人間性を現わす説明であって、このたとえの筋には直接関係はない。

大切なことは、この家令が主人から大きな責任をゆだねられていたことである。彼のような場合には、恐らく金銭の出し入れ全部を主人からまかされていたので、負債をまけてやることも、きびしく取りたてることも、その権限内のことであったに違いない。その証拠には、主人から「会計報告を出しなさい」という催促を受けていることからも明瞭である。

り、全く教会にとって新しい経験である事を認めるや代表を一人選ってその出来事を視察させようとした。選ばれた人物は、バルナバと呼ばれるクプロ生れのレビ人ヨセフであった。バルナバは「慰めの子」と行伝は解しているが、それは「励まし」を意味するパラクレーシス（παρακλησις）と関係している。彼はこのアダ名のように、極めて親切で楽天的な気分の持ち主で、都会の乏しきに当っては財産を寄附し（四・三六）、かつての迫害者サウロの弁護者として現われる（九・二六以下）。このような人物が選ばれた事は、それなりの深い事柄への配慮が働いたからであろう。しかしそこで起った事は教会の指導者たちの想像を絶する偉大な神の御経綸であった。バルナバはアンテオケにいたり、神の恵みの働きを見て大いに感動し、且つ共に主の祝福を味って伝道の励ましをなす。然したとえ彼が「聖霊と信仰とに満ちた立派な人」であったにせよ、アンテオケ教会の信徒たちが主に対する揺るがない心でその信仰を保持するためには、彼一人の力量ではどうにも出来ない。その上「主に加わる人々は、大ぜいに」なりつつある。奨励と活気、信仰と喜び、それが集団の動きとなる時に、内にあっては深い神学的配慮とユダヤ的より異邦への壁を突破する論理と意志の強固さ又強ぢんさとか、外にあっては倫理な配慮と組織力と又説得力とが必要となる。そこでバルナバはかのサウロこそその適格者と睨んで自らタルソまで彼を捜しに出かけた。αναζητησαι（捜す）という言葉からして、それは相当困難な事であったろう。自分の役割の承認、適格者を求めんとするこの熱心、さらに今日の教会の形成と育成への問題を、今日の私共は学ぶに違いない。この物語りが教える第一の点である。パウロとして立つまで、サウロは異邦人伝道の使命に必要な糧を、ここアンテオケにおいて学ぶのである。異邦への生活感覚。ユダヤ人と異邦人の交わり、ギリシャ人と非ギリシャ人、地中海文明とシリヤの砂漠。福音はその最初からこうした異質文化の相剋の唯中で、その生命の活力を鍛われつつ、よき担い手、伝播者を待った。アンテオケ教会は、異邦伝道史に、サウロとバルナバを送り出す記事によって輝かしい第一頁をかざるのである。

使徒会議

使徒　一五・一―三五



一　伝道には自分の経験だけではどうにも解決できない事柄が常に起こるものだ。そういった際この新しい事柄を、何とか自分の考え方で解釈するか、又解釈できない場合には、自分の立場を固執してそれで事柄を曲げようとする。こんな所に、いつも伝道における意見の対立と、教会の分裂という、全く意図しなかった別の事態が生れて来る。教会史上の種々の教派の分裂・離合集散の足跡は、この事態を雄弁に物語っている。それは或る時代の歴史的必然性が、その必然性を失って、歴史の中でドグマ化するという事だろう。ここに私共が今日、新な事態の背後にある聖霊の導きを見て、分裂の危機を救うというばかりでなく更に教会が世界教会として自ら立ちゆく土台を次第に強固にしていった事をこのテキストから学ばねばならぬ理由が存するのである。

二　事の起りはこうであった。アンテオケ教会はもちろん、福音のクプロ及び小アジアへの進展は、保守的な、特に「パリサイ派から

聖書研究のための 毎週の教案

アンテオケ教会と 異邦人伝道

使徒 一一・一九—二六
同 一三・一—三



一 ステパノの殉教に始まる多くの弟子たちの離教は、一面から見るならば、ようやく成長しはじめた教団の芽を無残にも踏みにじるようであった。が神の御計画にあっては、教団がユダヤ的な偏狭さを脱し、異邦人の福音伝播の糾口であった。ステパノの殉教は異邦人伝道の隅の首石であった。ステパノに対して起った迫害のために散らされた人々は」（一一・一九、八・四） 御言を宣べ伝えながらめぐり歩いた」（八・四）。その中の或る人はピニキ（フェニキヤ）の海岸沿いに、ある人はフェニキヤより海路クプロの島に、或る者は又北上してアンテオケに進んだ。

二 この散らされた人々とは、大部分ヘレニストたちであった。迫害をのがれて、このアンテオケに来ったが、此の迫害にもめげず、彼らは伝道活動に従事した。その伝道範囲は行先々の町のユダヤ社会のヘレニストにのみ限られていた。所がその中のクプロとエジプトのクレネより来ったヘレニストの中に、数人の真に勇敢な人物たちが居り、この伝道の限界を越え、果敢にもギリシャ人によびかけ、イエスは主であり救主であるという福音の本質を卒直に語り始めた。ここアンテオケは異邦人と常日頃接触の多いローマ支配の土地である。彼らにとって語りかけるという事はさほど苦痛ではなかったろうが、神の国、イスラエルの救、いわゆる救贖史に何の知識を有さず、せいぜい「神を敬う」倫理生活の高潔さの理解と接近に止った彼らに、よくその福音の本質を、特にイエスのキリストたる事を告げ知らせる事は、まず理解という面で困難であったに違いない。だが、かの教法師（マルコ一〇・一七以下）のイエスへの質問が「永遠の生命」即ち最高善の問題との関連において問われている所をみると（本来は「神の国」に入る条件の問題であったのが、異邦教会の福音書の性格より、このような形に変化したのかもわからない）このアンテオケのギリシャ人たちは少なからず、救、不死、永遠の生命の保証を、この悩める僕の代贖の中に、又復活の死の勝利の中に、そして更にこの神の子の永遠の栄光の中に見出したればこそ信じて主に帰依し得たのであろう。問題が当時流行の密儀宗教によって与えられつつ、そこに何ら答えのない所に、福音が、その真実の答えを提供したのであった。まさに「主のみ手が彼らと共にあったため」に外ならない。彼らはかのコルネリオと同じように「神を敬う」人々だった。しかしそれは唯に個人或はその家族周辺に止まるが如き数少き群ではなかった。ここに本格的な異邦人伝道の幕が切って落された。ここに私共日本人キリスト者が福音の接触点、触発点を、今日の時代の思潮のうめきの中に見出さねばならぬ使命が与えられている事を示されるであろう。

三 アンテオケの状況は、直ちにエルサレム教会の指導者の耳に入

慮し、異邦人キリスト者の信仰の自由を危うくすることなしに、熟慮された意見をのべた。偶像に供えた汚れた物と、不品行と、絞め殺したものと、血とを、避けるように」と。私共はそこにパウロのコリント人への手紙にみられるような、誤りの中にある教会への温い愛情に裏うちされた鋭い眼の働きと同じものを読む事ができよう。

教会の危機はこれによって救われた。さらに新な異邦宣教への活力を得た。それにもまして教会が聖霊の伝達手段の役割を担うものである事が強く認識された（二八節）。教会はこの聖霊の担手として、世界教会への導きの手を聖霊にみつつ、進展していくのである。

ピリピ教会の設立

使徒　一六・一一―四〇



一　神の計画は常に人間の思いに先立つ。パウロの如き偉大な伝道者でさえも、その教会の設立には、それを準備するかのように、神が常に一人の人間を、福音を受けるべき人物として用意し給う。ピリピにおける最初の出会いの経験は、余す所なくこの事を語っているように思われるのである。紀元四九年に小アジアのトロアスから船出したパウロ・シラス・ルカ・テモテの一行はネアポリスに上陸してピリピに入った。ピリピはマケドニヤ上ヒリップスの名から来ているが、ローマの植民都市となったのは前四二年、アントニウスとオクダヴィアヌスが、シーザーの暗殺者ブルータスらと戦って勝利を収めた後、その部下をこの町に定住させた事に始まる。政治はローマ法に基づき、二人の行政官（dnumvirs）（長官 στρατηγος→praetor 執政官と称ばれる）によって治められて居た。

二　パウロの伝道は一定の法式がある。到着最初の安息日にその地にあるシナゴグに出席し、ユダヤ人にキリスト教を伝える機会を持つ。所がピリピにはシナゴグがなかったのでガンギテス河の岸辺、非公式の集会場を求めてゆくと、そこに「神を敬う」婦人たちが集って祈禱の式をなしているのに出会った。すぐイエスの救主たる事を説き明かす。そこにあったテアテラの紫布の商人で、ことにユダヤ教の信仰に入っていた一人の女ルデヤは真先にパウロの教説に耳を傾けるばかりでなく、イエスを主と信じ、家族と共にバプテスマをうけるにいたった。それはパウロのヨーロッパで得た最初の回心者であった。この回心を彼女はこの四人の伝道者を己が家に招じる事によって実際に証明する。それは或る意味で、長い間の準備、そして静かな福音との出会い、回心の経路であった。これがピリピで出会った第一の回心者であった。第二の回心者は、更に劇的な形であらわれる。もちろん、その後もパウロとの間に一番美しい関係を持ち得た教会ゆえ、他に多数の入信者はあったであろうが、ルカはその中三人を選び、それぞれ聖霊の特徴的な働きを物語らしめているのである。その点を考慮に入れて先に進もう。

三　それは「占いの霊につかれた女奴隷」であった。「占いの霊は原文では πνευμα πυθωνα＝a spirit, a python で中部ギリシャの Delphi の町のアポロの神託を授ける霊である。当時このような巫子の語る言葉は神の言葉とみられ、多くの人々が自分の運勢を見てもらうために来り、又それを用いて、相当の収益をあげる者たちもいたのである。この女奴隷はパウロ達のあとをついて来て、「この人

信仰にはいってきた人たち」にとっては重大な問題であった。それはパウロのコリント人への手紙が示唆しているように、異邦人キリスト者の加入に伴うキリスト者の道徳低下への憂いであった。確かに異邦人への神の救の御手の拡がりは、ユダヤ人がイエスを救主と認める事を拒んだから、その欠を補わんための神の特別な措置であり、その点に関する限り福音の拡大を否定するわけにはいかない。しかし、あくまでユダヤ中心の救いは完うされねばならない。そこに割礼と法律遵守の義務という事が救いの条件として問題になって来たのであった。これは救贖史理解の問題と深い関係がある。

この事はガラテヤ書を繙く時にその問題の性質の深さを知る事ができるが、今簡単に抽出するならば、救いの方法という信仰の根本的な問題と、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との交際という教会における実際問題という事になろう。この二つをめぐって「少なからぬ紛糾と争論」(二節)とがアンテオケ教会でユダヤから下って来た者達と、パウロとバルナバらとの間に生じた。これは単なる一教会の問題として個々解決せられるといった性質のものではない。いわばこの解決はかかってエルサレムとユダヤにある諸教会、およびアンテオケ教会とその姉妹教会の間に、分裂という危機を生むであろう事態への解決につらなる。そこで母教会のエルサレムでその答が与えられねばならぬ。「パウロ、バルナバそのほか数人の者がエルサレムに上り、使徒たちや長老たちと、この問題について協議することになっ」(二節)のは、こうした理由であった。予期してたように、パリサイ派から信仰にはいって来た人たちにより、鋭く、それも執拗に割礼と律法の問題が提出された。何とその思いのネバッコイ事か。「主張」「審議」「激しい争論」「沈黙」。この議場の異常な熱ぽい雰囲気をうかがい知る事ができる。それはあのイエスを十字架につけづんばやまなかった学者・長老・祭司たちの、ダマスコまでキリスト者を縛せんと出でゆきし、かつてのサウロの、あの意地に似たものがある。なぜ、パリサイ派の人々は、この問題を、こうまで、重視せねばならなかったのだろう。それは入信の経路に問題がある。「パリサイ派の人々は、復活の教理を信じていたので、彼らの特色ある信仰を捨てずにキリスト者となることができた。彼らはすでに信じていたことに、ナザレ人イエスは死人の中からよみがえらせられ、それによって神により主でありメシヤであると宣言されたとの信仰を附け加えた。けれども彼らのキリスト教が、これ以上に出ない限り、彼らは心の底ではどこまでも律法主義者であった」(ブルース)からである。儒教よりキリスト教に入信した明治初代のクリスト者の入信問題に関連して、この事は一つの研究課題であろう。

解答は如何にして与えられたか。十二弟子の筆頭としてのペテロが立ち、かつて聖霊が鮮かに示し語った異邦人の救い、福音の受入こそ解答であり、再び人の考えによって恩寵を否みする事を強く叱責する。主イエスのめぐみによって、われわれは救われたのだと信仰の根本問題と、その証拠の上に立って、鮮かに問題を処理してしまった。歴史は神の摂理の唯一の働き場所である。この確信なくしてよく伝道はなされるものではない。ペテロの卒直さとこの烱眼こそ伝道と問題解決の生命力である。ついで新たな「異邦人の間に神がおこなわれた数々のしるしと奇跡のことを」バルナバとパウロが説明する。最後に主の兄弟ヤコブが立ち、第二の実際問題の解決を、アモスの預言を引用しつつ、異邦人キリスト者には割礼と律法の義務を課する事は拒まるべきだ、救の道とその交わりの条件は同じでなければならぬと、まづペテロの言葉をもう一度敷衍し、再確認しながら、すすめてゆく。福音の弁証は、同時に実際問題の解決の智慧に連らならなければならぬ。ユダヤ生れの「弱い兄弟」たちを配

る。一つはパウロ自身の内的な経験であり、一つは直面した迫害とガリオの判決である。伝道にとって大切な事は、この内・外の経験の中に、強い神の御霊の導きの御手を具体的に味う事と、そこで語らんとし給う神の御言葉を読み取る強い神の御旨への献身という事であろう。第一の内的な経験とは、コリントに到着する前の数日のアテネの経験である（一七章、コリI二・一―七参照）。彼がこの地で味ったのは、明かに伝道方法の失敗であった。エピクロス派にしてもストア派にしても共にキリスト教以前の異教世界おける不安と困難の時代の人生哲学の一つで、救の問題に関する限り共に議論し得る立場になったろうが、福音の中心たるイエスと復活の弁証に関する議論については、全く理解の場を持ち合わせなかった。もしパウロが個人の霊魂の不滅を説いたら、エピクロス派以外の人々の賛成を得たかも知れないが、それは福音の中心ではなかった。更に彼らにとって「復活」は否定さるべきものであった。かつての伝道はそれなりに成果があったというのも、既に種々の形を通して福音への準備がそれなりにある（神を敬う人々等）。しかしルカが記しているようにアテネの人々の興味は「耳新しいことを話したり聞いたりすること」で、そこには最初から、意識の上でのスレ違い、平行線があり、神の側の導きへの準備の一点すらもそこにあったことは言い難い。たとえ格調高きパウロの弁証ですら、初めより彼らには聞く耳が存在しなかった。それは伝道方法の失敗ばかりでなく弁証の限界でもある。宣教が伝道への力となる為には、弁証に力が加わらなければならない。それは、言葉や知恵以前の問題である。ここに「イエス・キリスト以前のことは」語るまいと決心したパウロの心情である。再度のキリスト体験、これがコリントに来ったパウロの内的な経験であった。

二　コリントの市情はコリント書に詳わしい。古典ギリシャ語でも Κορινθιαζω は不品行を行う事を意味し「コリント人の娘」（Κορινθιαι Κοραι）は売春婦の事で、コリント、とは性的放縦の代名詞であった。人間の感覚は常人であれば、不安と怖れを感ずるはづだ。思わぬ伝道の失敗の経験はなおの事、彼の心持ち恐れと弱さに導いただろうが、東西交通の要点、ヘレテズム文化の交流、それは激流であったろうが、福音の種子の交通でもあろう。パウロはこの地に特別の焦点を凝らしてかなりの時をさいて伝道した。最初の出会いが彼との同業者、それもクラウデ帝のユダヤ人退去命令によって、ローマよりこの地に来った、アクラとその妻プリスキラであった事は、種々の点で便利な事であった。一八章の後半の記事又ロマ・テモテの諸箇所によって此の夫妻の信仰と、伝道の熱心を思う時に、既にコリントに来る前に彼らはキリスト者であったように考えられる。伝道は場所の有利さが事を導くのではない。よき支援者のある時、その成長は強い。

三　ここにコリント最初の回心者をシナゴグの隣家の「神を敬う人」テテオ・ユストと更に会堂司クリスポの家族一同が与えられる事により、更に信徒を多く与えられる。そして主が幻の中にあらわれて、前途に横わる伝道と、味うであろう困難に対し、大胆に福音を宣べ伝うべき事を彼に語るのである。これが副線となって第二の豊かな経験に導かれてゆくのである。

　異邦における同国人の間から、又異邦人コリント人の中から「神を敬う人々」の中から、多数キリスト者の回心を出すという事は、ユダヤ人にとっては極めて面白くない事であった。神への熱心（ζηλος）は人への嫉妬（ζηλος）となる。彼らはパウロを捕えて、総督ガリオの法廷にひっぱって行って、ローマ法は認可されていない宗教を宣伝していると訴えた。彼ガリオとは修辞学者大セネカの子で、哲学者セネカの兄、詩人ルカンの叔父、マアカス・アンネウ

たちは、いと高き神の僕たち（δουλοι του θεου του υψιστου）で、あなたがたに救の道（οδον σωτηριας）を伝えるかただ」と叫ぶ。この「いと高き神」の尊称はユダヤ人にとってもちろんの事（創一四・一八 Eliyon）異邦人にとってもギリシャ的至高の神存在を示す言葉であったし、救は前同にも指摘した如く異邦人も共に求めている事柄であった。悪霊の支配を解き放つ使命はキリストの御業である。その救の本義が人々にたとえ、かくされていようとも、悪霊はそれを知る。パウロの困惑は、幾日間も、この間断の叫び声が続いた事にもよるが、一つは八・九、一三・六にあるような魔術師との因り合いと、その種類を異にする事実であったからに違いない。そこでパウロは「イエス・キリストの名によって」女から悪霊の出ゆく事を命じた。その瞬間、霊は女から出て行った。この後彼女が使徒達と、どんな関係を持つかは明瞭でない。しかしこの事は福音の勝利の狼火であった。

四　この事件は意外な方向に発展し、彼らが獄に入れられる結果を招いてしまった。ここに第三の回心が起る。それまでの経過は行伝に詳しい。注意したい事は、此の獄吏が自殺寸前に追いこまれて、そこに回心の契機が迫り来ったという事であろう。獄吏の仕事は主として退役軍人が当てられていたという。自己の業務に忠実である事は生の保障であろうが、その失退は同時に死である。大地震によって獄の戸が全部開いてしまった事は、囚人たちが全部逃走してしまっている事を予想させた。彼はそう思い自己の責任と規律の観念とにより、自己の一切の責任を自分に課す。とるべき道は唯一つ。それは自決という道であった。所が囚人はおろか全ての者達が獄中にあるばかりでなく、自分に向って「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」と呼びかける。彼は驚きかけこんで「先生、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」とひれ伏しつつ求めた。これは事態の余りの予期し難い事柄から、安堵した気安めの言葉ではない。獄吏と、囚人としてのパウロ達との精神的な位置が、ここで転倒しているのである。管理するものがその職権を、管理されている囚人たちによって保証されている。多くの場合、人間社会の人間の価値は、その職能によって決定・評価され、その人のもつ精神的価値による事は少い。一度その職能を失った人への冷酷なまでの社会の人々の目よ!!この価値の転例が彼の人間を喪失させたのである。彼はここに一人の人間として立つ。その上、自己に課せられた死による責任遂行よりも解き放たれている。それがこう叫ばせた彼の状況であった。パウロの答えはイエスを信じる信仰こそが、彼と彼の家族の救われる道である事を告げる。

これがピリピ教会の東雲だった。三つの典型的な回心の記事を通し、ルカは、聖霊が、それぞれ一人一人、その人にふさわしい姿で回心に導く事を示そうとしている。第一は静かな、敬虔な神の信仰への準備の姿として、第二は、福音の一方的な圧倒的な力を以て、第三は、死の迫しせまった危険の中にあって、人間の個の魂に触れる回心として。神の豊かな導きに、開かれた瞳を、私共は持たねばならない。

神の言とコリント教会

使徒　一八・一―一七

一　コリント教会の設立には、二つの事柄が、深い関係を持ってい



な此の主の御名によるバプテスマをほどこす。その情景は、かのペンテコステのそれと一致する。シリヤにおけるアンテオケと同じく、アジアにての異邦人伝道への力は、この等しき業によって新な位置をエペソに見出した。一二人はやがて長老として、使徒的伝道的な仕事に参加する。それは使徒的な業の依託の中に、教会の成長とその伝道の役割とか、準備せられてゆく事を示す事件であった。

第二の事件。かくてパウロは二年間ツラノという名の教師の講堂を借りて「神の国について論じ」活発な伝道を行ったが、その伝道の特徴は神の力の異常な力ある業、特にいやしと悪霊の追い出しとの業であった。行伝はパウロの身につけている品物、いや他の悪魔払いの祈祷師たちまで遂に主イエスの名によって、それが悪霊につかれている者から悪霊を追い出す大きな力を持っている事がわかったので、この名を用いはじめた。しかしユダヤの祭司長スケワの七人の息子たちにおこった事件は、聖霊の力ある業はその信仰の故に価値のある事柄なのであって、その力の故にのみ唱えらるるような種類のものでないことを示していると思う。

使徒にある所の「霊と力との証明」コリI二・四がよく教会設立の基礎の力となったように、此のエペソのこの第二の事件の雰囲気は、悪魔的力への勝利が、特に古代の魔法の中心としてその名声をほしいままにしていたエペソの市にて行われた事と相俟って、「言に命があった、そしてその命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに打ち勝たなかった」（ヨハネ一・四、五）事を興味深く示してくれている。悪霊への勝利は、同時にそれにつかれていた人を、己か福音の懐内深く抱く事につらなる。魔術師の入信は、それ故に劇的である。福音の力は「〜から福音へ」というのでなく「〜のなくなる事」、すなわち福音に接する時に悪霊はその頭を地にたたきつける。これが真の勝利の姿であった。

第三の事件。エルサレム帰還のためやがて出発せんとした時に事件が勃発した。三一節に「アジア州の議員（Ασιαρχης）で、パウロの友人であった人たちも」という句節に注意しておこう。この称号はアジア州の諸都市にいる一流の人々に与えられるもので、当時のローマ社会のクリスト者の階級が、どの程度であり、その福音の支持者が相当の階級であった事を示し迷信深い階級と質を異にしつつその教養の高さの中に福音がその根を下ろしていった事を物語っている。このような雰囲気の中でこそ、市の書記官の如く間接的に護教者を与えられたのであって、その道理をつくした論駁の態度は同時に今日の私共の福音弁証の一つの在り方を示している。

第四の事件。このミレトのエペソの長老たちへの説教はパウロの信徒に対する教会の勧告といってよい。（I）伝道の回顧、それは未来の伝道への責任を含む。それは「呼びかけであり、呼びかけとしての答、すなわち決断を要求する」（ブルトマン）（一八—二一）。（II）来るべきエルサレムでの試練を予想しつつ福音への自己放棄、キリストにある神の無代価な恵みの福音の宣言と、自己の足の歩む信仰の行程の走破こそ伝道者の真骨頂である事をつたえている（二二—二四）。（III）福音の水注ぎの役割を伝えて（二五—二七）、（IV）神の群の監督者の責務は聖霊によることを明らかにしつつ（二八・二九）、（V）出会うであろう教会への試みを予言して、内に貯えられた神の言葉の成長を祈る（二九—三二）。（XI）それは使徒的教訓の授与、信仰と実践の規範、これこそ決別の祈りであり、神の御手にゆだねなければ福音の相続を期得出来ぬ、ギリギリの伝道者の心境である（三二）。（VI）最後に神の民の愛の業について。成長への準備の生命力を教会の内にみつめつつ、新た開拓の使命の為に自己の育てし教会を去る牧者でなくては味わい得ぬ内容だ。教会の生命はこの所に宿る。

ス・ノヴアトスの事で、コルドバの生れ、後ローマに来ってルキウス・ユニウス・ガリオの養子となり、後同姓を名乗った人物であった。その決裁について私共は神に感謝せねばなるまい。

　パウロはユダヤ人たちの訴訟に対し、後日ペリユスやアグリッパ二世になされた演説による弁明と同じように、此の時弁明をしようとしたが、ガリオは、ローマの法治官としての鋭い感覚から、その内容はどこまでもユダヤ律法の解釈に関する問題である事を見抜いた。総督の義務は此のローマ植民都市、それも「ユリウスの誉なるコリント」という名称を与えられているコリントをうまく治める事であり宗教・道徳・倫理の問題は根本的な問題ではない。従ってその様な訴訟の内容は、彼ら自身解釈すべき事とし、彼らを去らせる。彼の此の態度は、こういった結果、会堂司ソステネが私刑にあっているにもかかわらず、我関せずの態度を生む。福音に対してこのガリオの態度は、政治感覚から来る消極策であったが、しかし、キリスト教を擁護した、それも公認のユダヤ教の一派と見なしただけにすぎないにしてもことはネロの迫害の始まる前十年間の福音の歩みを順調ならしめる結果を生んだのである。もしこの裁定がなかったら、パウロの伝道も、ずい分違ったものになったろう。一高官の冷酷なまでの判断が結果として熱き信仰の進展となりゆく事を、誰が一体予想したことであろうか。この二つの経験を通じ、パウロの学んだ事は、恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」という主の御言葉の確信であった。伝道とは、宣教とは、教会とは、此の未来に於ける神の備えへの確信のない所には、その力は生れて来ないものなのである。

エペソ教会とパウロ

使徒　一九・一―四一
　　　二〇・一七―三八



一　新たな異邦人伝道の準備が、神の側においてなされつつあった。遂にヤコブのエルサレム教会での指導的役割の獲得によって、伝統が聖霊の働きに対する優位を得たにせよ、ヘテロのマルネリオ回心を通してエルサレム教会は、そのユダヤ的保守性に止る事はできなかった。時代はやがて過ぎ、教会は使徒との直接的な結合を離れ、いわゆる普遍史の唯中で、自己の終末的性格を形成してゆかねばならぬ。そのために、神は象徴的に、エペソの教会の長老達とパウロの決別を通して、この意志を語り告げ給うのである。

二　ここに四つの事件が誌されている。㈠完成のバプテスマ（一―一〇）、㈡悪霊の支配に対するキリストの御名の勝利（一一―二〇）㈢護教者の出現（二一―四一）、㈣使徒的訓練（二〇・一七―三八）第一の事件。エペソに入ると一二人の人達にパウロは出会った。彼らの信仰又知識はアポロ（一八・二四以下）と同じように、大切な一点で最大な欠陥を有していた。それは「真理の御霊」助け主なる聖霊力の聖霊、そしてペンテコステにおいて与えられた「完成としての聖霊」のバプテスマであった。彼らのバプテスマはヨハネの、あの待望のバプテスマに外ならなかった。パウロはかくてヨハネのそれとキリストにあるそれとの関係を示す事により、すでにその先駆性は終りを告げ、新たなキリストの集団としての交わりに最も大切

宗教裁判で、「もしひとが聖書の証明によって、あるいは決定的な理由によってわたくしを説得するのでなければ、わたしは取消すことができません。ゆえにわたくしは教皇の不可謬性も教会会議のそれも信じません。……そしてわたくしの良心は神の言葉にしばられているのです。……」と語ったことは、この良き例であろう。

三、聖書と権威　プロテスタントは「紙の教皇」をもっているとさげすまれる。紙に人間が書いた生命のない言葉が、キリスト教信徒の生活の中で、神の権威を有するとは何を意味するのであろうか。文字に権威があるのではない。外見的には使徒たちの書いた記録であるが、聖書を通して聖霊によって内的に明らかに示されることは、神の人間に対する救いのみ業である。この事実に教会の権威があり他の地上的な、可見的なものに頼らない信仰の事柄である。

四、教会と伝統　聖書以外に権威を求めて、カトリック教会のように教皇の使徒継承権などに依存する時、教皇の回勅にも聖書と全く同等の権威を持たせる誤謬を犯してしまう。信仰は何か固定したもの、伝承、制度にその根拠を求めない。教会も同じである。教会における伝統の信仰でなく、信仰の伝承が生命をもつのである。

教会が正しくキリストの教会であるためには、それゆえ断えず耳を澄ませて神の言に聴くことをしなければならない。神の言はしばしば「静かな細い声」(列王紀上一九・一二)であり、不注意な人間のとらえ得ることではない。それは聴く者の祈りと覚醒を強く要求する。使徒的な教会という意味は、たえず神の言を聴き、それを教、語り、そのことにのみ生きている教会、神によって召され、神によって遣わされて語る教会である。

五、教会の責任　㈠宣教は神の命令である。「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び別たれ、召されて使徒となったパウロ」(ローマ一・一)と聖書に記されているが、神の言にすべてを委ねるものは必然的に神の言に押し出されてそれを伝えるものとなる。「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒一・八)。教会の使徒的使命の第一はこの世に出て行って、福音を証しすることである。㈡宣教は根本的な価値の転倒を意味している。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(ガラテヤ二・二〇)。教会のすべてがキリストに在るならば、「外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」(第二コリント四・一六)。既成の教会は存在しない。伝統に依りかかった教会は存在しない。御言によってキリストの現在を日々新たに確信して、日々新たに革新される教会のみが存在する。㈢宣教は時間と永遠との間にある。教会が活動することは、この世に神の国を建設するという楽観的な人間的な理想によって行動することではない。神の意志の全き啓示は終末において明らかにされる。教会はこの世の中に埋没してはならない。「この御国の福音はすべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ二四・一四)。上よりの御言に生かされつつ、この世における活動を行うという、教会の在り方は困難であるが、しかし決してこの見えない教会と見える教会の二重の構造を失ってはならない。使徒の時代より教会はこの困難な戦いを続けて今日に至っているのである。

教会の使徒的使命

ヨハネ　一七・一八―二六

信徒学級



使徒と預言者の上にたてられた教会

エペソ　二・二〇—二二

一、使徒と預言者の土台。　使徒は「遣わされた者」の意味、預言者は「召され、告知する者」の意味を有する。エペソ人への手紙ではもちろん主イエスの一二使徒、旧約の預言者のみを指しているのではない。初代教会において福音の真理を伝え、教会の秩序の維持に当った者が、種々の賜物に応じて働き、使徒、預言者、教師などと呼ばれている。第一コリント一二・二八、一四・一以下、エペソ四・一一などを参照しよう。

もちろん、使徒や預言者が教会の土台というのではない。エペソ二・二〇を記した時、パウロの心中にあった事はピリポ・カイザリヤ途上の主イエスとペテロたちのエピソードであったであろう。「あなたこそ、生ける神の子キリストです」とのペテロの信仰告白に対して主イエスは、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこでわたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」と答えられた。聖霊に導かれる信仰告白（第一コリント一二・三）の上に教会はその基礎を有し、キリストがわれらと共にいましたもう時と所においてのみ一切は始まりまた終るのである（マタイ一八・二〇、エペソ一・三—二三）今月は教会の本質的性格の一つである使徒性について学ぶように定められているが、まず第一に上述のことを心に留めておく必要があろう。教会の権威も使命も人間のことでなく、神のこと、キリストのことである。

二、教会の権威について　カトリック教会は、主イエスが、使徒たちおよび教会的に認証されたその後継者である司教に、自らの権威を与えたもうたという仮定に基礎づけられた、教会の権威を主張する。「使徒から現在の司教に至るまで、正当に叙品された司教が、中絶することなく継承されていることをいう。司教はキリストが使徒に与えた牧職、祭職、教職の権能をうけているから、その教えも権能も使徒から伝わっている」（エンデルレ書店、キリスト教百科事典、使徒継承の項参照）。英国教会も同様の主張をする。

ギリシャ正教会は、教える者の権威より典礼的権威に重点をおいて、その権威の基礎をやや変えている。教会の役務を通し、すなわち司祭職と信徒との両方を通じて、キリストの事実が聖礼典の中に絶えず現在すると主張する。

プロテスタントは、神の言としての聖書にのみ権威を見出す。使徒的権威は聖霊の導きによる使徒のキリスト証言である聖書の中に、全く、具体的に保存されているとする。ルターがヴォルムスの

は、家とは、私たちの生きている空間的な場における隣人であり、職場の仲間であり、大学教会、工場教会などである。生活や仕事の場を単位とした小グループである。複雑化した社会にあって、それぞれの共同体の中に教会が生き、存在せねばならない。

五、キリスト者の在り方　ウェーバーはその論文の中で二つの文章を引用している。その一つはバニヤンの『天路歴程』の冒頭である。「私は一人の男が走りはじめた夢を見た。かれは自分の家の表からまだいくらも走っていなかったが、かれの妻と子供たちがそれを見つけて、かれに戻ってくるよう泣き叫んだ。しかし彼は耳を手でふさぎ『生命、生命、永遠の生命』と泣き叫びつつ走りつづけた。そして彼は後をかえりみず、平野のまっただ中へと走り去っていった。」

もう一つはボンヘッファーの獄中書簡の一節である。「僕はここ数年の間に、キリスト教のこの世性について認識と理解とを、一層深めることができた。……それは深いこの世性、いつも死と復活とを現在知っているといった、完全な訓練のことだ。ルターは、そうしたこの世性を生きたにちがいない。……完全なこの世性を生きることによって、はじめて信仰が得られる。聖人であれ、悔い改めた罪人であれ、教会人であれ、義人であれ、病人であれ、健康な人であれ、彼らが自分自身で何かをなすことを全く断念したとき、それが僕のいうこの世性なのだ。つまり、全く神のみ腕の中に身を委ねて、与えられた課題と問題、結果の良し悪し、経験の深さと思慮のなさとを使いきって生きるとき、もはや自分の生活を重大なものと思わず、この世における神の苦難を真剣に考え、ゲッセマネのキリストに注目するとき、それこそ信仰ありで、悔い改めである。この結果、人間は人間となり、キリスト者になるのではなかろうか。」前者に真に徹することが、後者に向い、今日のキリスト者の在り方を完成するであろう。

六、キリスト者の活動　前述のように、たとえば家の教会のように、社会の中に教会が滲み渡ってゆくことが出来るならば、キリスト者は第一に「万人祭司」を実践するであろう。神に仕えることが、同時に互に仕えることであることを日常生活の中に体験、実践し得るであろう。第二にキリストの預言者としての聖務に参与できる。説教が、講演があまりに一般的な問題に対する一般的な解答であるに反して、日常の生活や仕事の中で起ってくる大小の問題について、神の光の中でとらえ、考え、そして語り得るからである。第三にキリストのこの世の支配へ参与できる。キリストへの服従が職業生活、社会生活の中で具体的に果されていく、精神的、観念的な信仰から生活化した信仰へと進みうる。

キリスト者が聖徒とよばれ、この世のただ中にあって聖なる生活を選ぶためには、絶望の中にある人に方向と目的と希望とを与えようとして、現代社会の入りくんだ複雑な問題を負ってたたかう者であらねばならない。

和解の務

ヨハネ　二〇・二三　エペソ　二・一一—二二

一、贖罪と和解　(一)キリストの苦難と死による贖罪とは、神に対する人間の反逆、神との交わりの断絶であるところの罪からの人間の救であることは言うまでもない。それゆえ贖罪は、神との交わりの回復すなわち和解にその根本的な意味を有することになる。(二)和解はキリストの十字架によるものであるから、これは「神の」行為で

一、この世への派遣　使徒とは前回学んだように、「遣わされた者」という意味である。「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」（ヨハネ一七・一八）。この主イエスの最後の御命令を考え、教職、信徒の別なく、キリスト者はこの世に主のみ業をなすために遣わされていることを学ぶのが今回の目的である。この機会に近頃特に注目をひいているクレーマー及びその流れを汲むウェーバーの発言を紹介したいと思う。

二、教会と世界　近世におけるいわゆるキリスト教王国（Corpus Christianum）の時代には、教会の影響は生活のあらゆる領域において直接に感じられていた。しかし世界の激しい変化と共に、今日教会は世界の片隅に押しこめられてしまっている。しかし皮肉なことに、このような、ボンヘッファーのいう「成人した世界」にあって反って教会は自己の世界に対する関係を、世俗の中に埋没することを免かれて正しく考える機会を与えられたのである。

「成人した世界にあっては、教会はもはや聖職者による世界支配を主張しようとはしないし、この世界を教会化しようとの試みをも捨てるであろう。教会の新しいあり方は、奉仕者としての姿をとるべきであろう」という発言は正しい。ディアコニアの教会である。このためにキリスト者は互いに重荷を負いあい賜物をわかちあい一致の心を持たねばならない。教会はコイノニアであるべきである。

三、教職と信徒　「平信徒は教会の用いられない凍結された資本である」とはクレーマーの有名なモットーであるが、これは戦術ではなく、本質にかかわる事柄である。エペソ四・一一、一二によると、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師が立てられたのは「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ」るためであった。すなわち信徒が第一なのであり、聖なる務、キリストに仕える務は教職でなく、すべての信徒によって形成される。

また、牧師や伝道者のみが信徒教育に当るのではない。霊の賜物は多様に多様の人に与えられている。今日の教会において、どれほど多くの霊の賜物を与えられている信徒が、空しく埋れたままでいることか。キリストはいつも世界の歴史の中に、その時と場に必要な人材を、彼の教会に与えたもうことを確信してよい。霊の賜物を持つ者として、教会から認められ、受けいれられて、その奉仕の仲間入りをする者は、すべて聖別されるべきものであろう。

教職と信徒を分つ溝は次第に取り除かれつつある。人を区別するのでなく、その機能上の相違が問題にされているのである。パウロはテント造りをしていたし、四、五世紀までの教職は、監督でさえも、その任務の職業的専従者ではなかった。第一テモテ三・四には監督が中年の、すでに信徒としての実績を立証した人物であるべきことが暗示されている。今日たとえば神学者はジャーナリストを非難せず、ジャーナリストになって、日常の事件を福音の光によって洞察し、技師労働者は、教職が雲上人であると歎くことなく、職場において福音の証人とならなければならないであろう。

四、教会の在り方　㈠教会は集合において存在しているのみではない。「離散している」時にも存在している。教会はエクレシアであり、同時にディアスポラである。ローマ一二・一―二に明らかであるように、教会の集合は、次の離散への配慮をもたねばならない。聖餐式を伴う礼拝の終りの祝禱が、この意味で最も聖なる瞬間である。「いざ我らいでゆかん」主の御名によりてアーメン」（聖公会祈禱書改定版一五一頁）。㈡個々の地域に現存する出来上った教会を、宣教の教会の焦点としない。具体的な社会的環境にある人間が焦点となる。教会は古代の機構、形態にすがりつくことなく、社会の中に浸透してゆく姿を新しく見出さねばならない。㈢「家の教会」が一つの提案である。初代教会はここに生きていた。今日で

塩であることをやめることなく、この世をキリストにおける神との交わりの回復また互いの交わりの回復へと導くために、この世の中に浸透し、自らの一切をささげてゆくのである。

四。罪のあがない　参考のために代表的な贖罪論を簡単に紹介しておこう。その所論は単に神学上の学説に留まることなく、そのまま教会の実践の指針ともなるであろう。十字架を負うとはいかなることかという点を明らかにするからである。㈠**代償**。第二コリント五・一四－二一参照。主イエスは罪ある死すべき人間に代って死にたもうたのである。㈡**贖宥**。あがないは元来捕虜や奴隷を身代金で買いもどすことを意味し、「自由を与える」、「解放する」意味をもつ。罪のために神の怒りによって罰せられるべき人間が、キリストという贖いによって救われ、解放されるのである（ローマ三・二五）㈢**和解**。神が自ら恵をもって、キリストにおいて、人間の罪をゆるして、人間を自らとの交わりの中に入れたもう（第二コリント五・一八、一九）。㈣**救贖**。キリストとの一致において、その死と復活に与り、新しい生を与えられる（ローマ六・一－一四）。

教会は「神が御子の血であがない取られた神の教会」（使徒行伝二〇・二八）である。キリストのあがないによって神との交わりに生かされたものとして、キリストの心を心とする在り方を求め、この世を神との和解のために、そのなし得る限りをささげよう。

初代教会の生活

使徒行伝二・四一、四二

一、使徒の教え　カルヴィンは使徒行伝二・四二に記されている初代のキリスト者の生活、㈠使徒の教えを守る、㈡信徒の交わりをなす、㈢共にパンをさく、㈣祈をなす、を正しい教会の形であるとした。根源に還ることは、常に新しく生きるための唯一の道である事を思い、この四つの事柄を学んでみたい。

使徒たちの教えは、キリストに関する一切のことがらであり、やがて福音書に、新約聖書に結集されて行ったものであった。ペテロはペンテコステの日の説教で「このイエスを、神はよみがえらせた。わたしたちは皆その証人なのである」（二・三二）と語っているが、主イエスが今、ここに、私たちと共に生きていまし、救となりたもうたという信仰に力強く生きていたのが、その当時のキリスト者であった。続いて使徒行伝三章に、ペテロとヨハネが「美しの門」で行った奇跡が記されているが、「イエス・キリストの名によって歩きなさい」という実証された生活もその良い例であろう。

使徒の教えを守るとは福音に生きることである。「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ五・三九）。「わたしが命のパンである」（ヨハネ六・三五）。

イエスが荒野の誘惑において悪魔を斥けられた時の言葉の一つ、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」は申命記八・三の聖句である。申命記の一章から一一章までは、神がイスラエルになしたもうた恵のわざを回顧している部分であるが、荒野の四〇年の試錬を思い起し、マナの奇跡を思い、神への徹底的な信頼以外に生きる道はない事から説き起している。神の民イスラエルは、このように「主の口から出るすべてのことばによって生きる」以外にその生命を保持する道はない。キリストの来臨と共に全世界に及んだ新しいイスラエルの民も全く同様である。

毎主日の礼拝に与えられる説教も、講演でなく、主張でなく、宣

ある。「すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ……」（第二コリント五・一八）。これは神の恵である。㈢このような神の和解は「いかにして」実現されたか。それは「罪の処置」をしなければならない。罪の審判を含む恵の和解である。「神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである」（第二コリント五・二一）。㈣贖罪の意味は和解であると共に、人間を「罪と死よりの解放」することである。「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである」（ガラテヤ五・一）。キリストの十字架は私たちにとって敗北でなく、勝利である。生命にその存在の意味を与えるものである。「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ一六・三三）。㈤贖罪は和解と勝利に加えて、キリストの「従順」をその中に含んでいる。「……おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」（ピリピ一・八、ローマ五・一九、ヘブル五・八、九）。

神の恵によって、キリストにあって、人間は神との和解、交わりを回復された。ここに人間相互の間の和解、交わりの回復の根拠があり、その唯一の方法が与えられる。「……十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。……」（エペソ二・一三―一八）。キリストのからだとして、キリストの御委託をうけ（ヨハネ二〇・二一）、教会はこの世において「和解の務」（第二コリント五・一八）を与えられている。それはキリストの足跡に従うことによって果されるであろう。次に教会のこの世に対する在り方をこの観点から考えたい。

二、この世を超える教会　旧約より一貫している信仰は、「神を神として拝する」ことである（出エジプト二〇・三、ヨブ四二・一―六）。「わたしの国はこの世のものではない」（ヨハネ一八・三六）という主イエスの言葉もこの意味である。教会が教会であるためには、ひたすら神のみを神として、神以外の一切のものを斥ける決意を絶えず新たにしなければならない。自己の真の本質を決して失うことがない時に、教会ははじめてこの世に対する発言をなし得るのである。あくまでも世俗化を排し、福音の純粋性を保つことなくして、この世の混乱と無秩序に立ち向かうことは不可能である。和解という時に、神はいたずらな妥協を人間と行いたもうのではない。神は神として、罪を見逃すことなく審きをもって臨み義を貫きたもう。キリストにおいて罪をさばきたもうたことを忘れてはならない。

三、責任を負う教会　神は上述のように絶対他者でありたまいつつ、しかも人間のために責任を負いたまい、人間の立場に立たれるために、人間のもとにまで来りたもうた。これが受肉、「人となりたもうた神」イエス・キリストの福音である。そして受肉の目的は贖罪、和解であった。このキリストの心を心とする教会は、他者であるこの世の問題性のために徹底的に責任を負う。教会が純粋性を保つという時に自己目的化の危険にたえずさらされている。しかし、教会はキリストに従って十字架を負わねばならない。そのためには、この世が負う問題に接触し、さらに深く知らねばならない。「もしあなたがたが不正の富について忠実でなかったら、だれが真の富を任せるだろうか」（ルカ一六・一一）とはこの意味にも解し得る。そして、具体的に、決して観念的でなく、この世に係りあって、自らの血を流し、肉をさいて、「平和の神」（ローマ一六・二〇）の証人とならねばならない。ソドムには十人ですら正しい者がいなかったのであろうか（創世紀一八・二二―三三）。「地の塩」は

たすら祈をしていた一（使徒一・一四）時、そこにあの聖霊降臨の大きな神のみ業が与えられたのである。「彼らが祈り終えると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した（使徒四・三一）。生ける神との交わり、祈りの生活が聖霊によって導かれていた所に、この力の秘密があった（ローマ八・一二―三九）。

特に共に祈りをする事が初代教会の原動力であり、それが定まった形をとって行った所に、礼拝の形式が整えられたのである。聖公会の礼拝書が「祈禱書」、Common Prayer（共同の祈り）の書と呼ばれるのはまことに意義深い。

この祈りはおのずから次のような順序をとり、そのまま礼拝順序の根幹をなしている。プロテスタント教会の礼拝や祈りが混乱し、牧師や教会の恣意に委ねられていることは厳しく反省され、初代教会以来の歴史の遺産にもう一度眼を向けて、現代教会の祈り、礼拝を正しいものとせねばならない（ヨハネ四・二三、一四）。㈠**崇敬の祈り**。礼を神として、けんそんと服従をもって御前にひざまずく。㈡**呼び求めの祈り**。聖霊の助けを礼拝に求める。㈢**ざんげの祈り**。神の前にひざまずいて、そのみ光の中に照し出された私たちに、まづ起るのはざんげである。㈣**感謝の祈り**。ざんげにあたって罪の赦しを再び確信し、その感謝をささげる。㈤**願いの祈り**。つづいて願いごとを神に告げることがゆるされるであろう。㈥**とりなしの祈り**。自分のことのみでなく、他のすべての事のため、人のため、代って祈ることを忘れない。㈦**死者の記念の祈り**。教会の全き姿は天上と地上の全教会である。過去と現在と未来と神の国に至るまで続く教会である。㈧**証示の祈り**。神の言は聖霊が私たちの心の中に証しして下さることによって明らかにされる。㈨**奉献の祈り**。神の恵をうけ、感謝のうちに、すべてをささげて主に仕える決心を言い表わす。献金はそのしるしである。教会の祈りも個人の祈りも、秩序をもって行い、神の偉大な力のみ業を真剣に待ち望みたい。

また「祈りは業であり、業は祈りである」。これは中世以来の修道院の標語であるが、生活がそのまま礼拝であり祈りであることを忘れないようにしよう（ローマ一二・一―二）。

話しあいのために

今年の十一月に、インドのニュー・デリーにおいて、第三回世界教会大会が開かれる。四月より今日まで「教会の本質」について学んで来たが、この時にあたって、エキュメニカル運動に焦点をあわせて、話しあいをするのがよいと思う。

一、聖なる、一つなる、キリストのからだなる教会を、聖句によってまとめて勉強する。

二、このために教会は何をなすべきか。エキュメニカル運動とは何か。

三、信徒は各自の立場にあって、このために何をすべきか。

参考となる書物のうち、入手しやすく読みやすいものを次に挙げる。

「イエスとその民」マイネア　日本基督教団出版部　一二〇円
「教会の革新」　ヴィサー・トーフト新教出版社一五〇円
「新しき教会の生命と使命」　〃　一四〇円
「交わりの生活」　ボンヘッファー　聖文社　一五〇円
「信徒、教会、社会」ウェーバー　日基教団出版部　二〇〇円
雑誌「福音と世界」　四月号　新教出版社　七〇円

伝でなく、修養談ではない。使徒の証言が伝えたものを、またそのまま私たちに与え、私たちに神の言として臨み、私たちの迫り、私たちの生そのものとなるべきものである。「あなたがたがわたしたちの説いた神の言を聞いた時に、それを人間の言葉としてではなく神の言として――事実そのとおりであるが――受けいれてくれた」（Iテサロニケ二・一三）。この初代教会以来の伝統に生きる教会こそ使徒たちの教えを守る真実の意味における使徒的教会である。

二、信徒の交わり　交わりについては六月に学んだことを思い出していただきたい。初代教会の信徒たちが共同生活、共産生活に至るほど心を一つにしたのは、決して律法でなく、強制でなく、「おそれ、一つの心、一つの思い、よろこび、まごころ、さんび」（使徒二・四三―四七、四・三二）に満たされた真実の信仰生活がおのずから結んだ実であった。

しかし、このような生活にしのび込む暗い影も聖書は見逃すことなく、私たちに教えて、反省を与えてくれる。アナニヤとサッピラの事件である（使徒五・一―一一）。

旧約聖書にも同様の記事がある。ヨシュア記七章の告げるようにヨシュアのアイ攻略の失敗の原因はアカンの戦利品私有であった。

信仰の生活も、共同の生活も、まったく自発的な自由なものであった。真実な心のみがそれを支えていた。それを虚栄や虚偽で汚したのがアナニヤ夫妻である。パウロも献金の勧めをして、「各自は惜しむ心からでなく、またしいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである」（第二コリント九・六―一五）と言ったが、私たちの教会の交わりにおいても、すべてにあてはまるであろう。現代のアナニヤやサッピラは私たち自身の心の中に生きている。信徒の交わりは社交でなく、虚栄でなく、習慣でなく、いわんやアクセサリーではない。主を拝する事において一つとなる礼拝の共同体がその本来の姿であろう。主に在ることにおいて私たちは一つなのである。

また教会の交わりは聖霊の支配の下にあり、権力や指導者や人間の恣意の下にあるのではない事が明らかとなる。「聖霊を欺き、神を欺く」（使徒五・三、四）ことは出来ない。「みな非常なおそれを感じた」と記されているが神にのみ心を向けて、教会の生活を続ける時に、私たちの教会は聖霊の導きに豊かに溢れるものとなるであろう（第一コリント三・一六、一七）。

三、共にパンをさく　「週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、パウロは……語りつづけた」（使徒二〇・七）とあるが、主の日ごとに礼拝するためにキリスト者たちが集まった集会は聖餐式であり、祈りと讃美と義についての教えが、主の晩餐という秘義的な交わりと不可分離に結びついていた。パンさきは、普通の食事、すなわちアガペー（愛餐）の一部であったが、愛餐の方はまもなく聖餐式そのものから分離されて、教会生活から姿を消し、儀式的な食事だけが残るようになって行った。

いずれにしても初代教会の生活の中で、共に食事をなして共同の生活をなし、また主の晩餐に与って主の生ける臨在を最も明白に自覚していたことは、御言の重視と共に二大中心であったのである。

現代の教会において、聖餐と御言とが全く等しく重視されねばならない。カトリックとプロテスタントはその一方の偏重を改めるべきである。この二つが均衡を保つところに正しい礼拝が存在し、正しい礼拝の存在するところに、真実の教会の中心が存在する。初代教会が使徒の教えを守り、パンをさくと記されている所に、現代の私たちの模範が与えられている。

四、祈り　イエスの昇天後、「彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひ

との人は本当に困ってしまうからです」と。

なるほどそれは困るだろう。しかしそうかといって、誰でも出来る、他人がいつでも代ることができる仕事にばかり就いていたのでは、その人の生き甲斐というものもないではないか。現代社会が巨大なメカニズムを生み個人の創意工夫の余地が次第に狭められて、機械化し、非人間化し、代置可能な存在となって行くことにわれわれは非常な問題を感じているところだ。だから少しでも個人のオリジナリティ（創意、独自性）が生きる所、つまり自分でなければ出来ない世界をもつようにすすめたいと思っている矢先に、さきの青年のように、逆に「専門家」が出ることは困るといったのでは、われわれはどうしたらいいかわからない。

こういった問題が出るのはひとえに、われわれの生がいつも死によって脅かされ、いつ断たれてしまうかわからないという不条理さに根ざしているからだ。

終末の倫理

結婚の倫理を聖書に求める時にわれわれをいつも当惑させるのは「コリント人への第一の手紙」七章にあらわれてくるパウロの結婚観である。つまりパウロは結婚してもいい、しなくてもいいが、結婚しない方がもっとよいといったはなはだ消極的な倫理を述べていることである。これはこれから結婚しようとする若い人々、既に結婚してこれからも大いに夫婦仲よくしようと張り切っている人には全くガッカリした倫理であり、熱湯に冷水を浴びせられたような感じをうける。一体キリスト教の結婚の倫理観はこの程度のものなのだろうかと疑う人もいる。

しかしまさしくキリスト教の倫理はこういったものであり、われわれが住んでいる「生」の世界はこういったものなのだ。

コリント第一、七章の倫理観を解く鍵は、「現在迫っている危機のゆえに、人は現状にとどまっているがよい」（七・二六）

「時は縮まっている」（七・二九）

という句にかくされている。つまり終末の危機の中に生きる人間の生き方をここで指摘しているのだ。ある聖書学者は、パウロがこの手紙を書いた時代（紀元五四年）は、人々は本当に「この世の終り」が明日かあさって来ると感じていた時代であったから、こんな消極的な倫理が出て来たのであって、実際は「終末の日」はまだやって来なかったのだから、今日はこのように消極的に考える必要はない、といっているけれども、果して終末の倫理ということをそう単純に片づけられるものかどうかは疑問がある。

先にあげた三つの例題は、今日のこの時代にも、終りの日のさばきがあることを示している。㈠善意から出た「面会謝絶」が人々に悔恨の念を与えていること、㈡亡き人が生きながらえるためには、日頃夫婦仲を良くしておかねばならぬこと、㈢死んだ時の用意に、人は自分独自の世界をもってはならぬこと、これらはことごとく、生の充実（希望、愛、独自性）が死によって断たれ、脅やかされ、空しくされてしまう不条理を物語っているのであるが、終末の倫理とはまさしく、生の時間を断ちきる不条理なものであり、われわれ人間はこの不条理の中に生かされていることを告げ知らされているのである。

終末に生きるキリスト者の希望

ここからわれわれは単に絶望と無倫理に生きることなく、かえってキリストによる復活と新生の希望が生れてくることを知らねばならない。終りの日を待ち望みつつ、この世の生をまじめに余念なく送ること、いつ召されてもよい心の用意をしつつ、この世の生活を奮闘努力すること、死の彼方に新しい生の命が約束されていることを信じつつ生る事、これが生と死の不条理にしばられた世界に生きるキリスト者の家庭倫理であると思う。

岩村信二

生と死の不条理

生と死の不条理

この世に何が悲しいかといって、愛する家族員を死によって奪われてしまうことほど悲しいことはない。愛することが深ければ深いほど、その愛が死によって断たれてしまうことは悲痛な事実である。しかしそれはしょせん「生」ある者の免れえない冷厳な事実でもある。われわれの家族の中にもそのような悲痛な出来事に直面した人々が多くいるであろう。

生が常に死によって脅かされていること、生が充実していればいるほど、それが死によって空しいものにされてしまうこと――これが「生と死の不条理」と称すべきものである。

三つの問題

われわれを生と死の不条理に目覚ましめる三つの問題をとり上げてみよう。

(一) 教会の中に一人の老女執事がいた。婦人会の会長もつとめて多くの人々に敬愛されていたが、ある日婦人会の帰り途、突然脳出血のために倒れ、附近の病院にかつぎこまれた。一時危機の状態を脱し、あるいは立ち直れるのではないかと、医師も家族も明るい希望をもち直し、一日でも早く全快を、と願って敢えて「面会謝絶」の看板を出した。そうすることによって病人の状態を少しでもよくしたいという善意からであった。しかるにその祈も空しく、二週間後に誰にも会わずに遂に天に召されてしまった。教会の人や婦人会員は、どうせ亡くなるのだったら一目でも会いたかったとくやみ、未練を残した。

これが一つの「生と死の不条理」をあらわす。すなわち「生かしたい」ために面会謝絶をしたことが、かえって人々に悔恨の情を残させてしまった。情が仇になったわけである

(二) 二十五年間一心同体となって暮していた夫婦があった。ことごとにつらく当る姑に対して二人はより添い合い、助け合って生きて来た。夫婦喧嘩一つせず、本当に蜜のように甘い夫婦だと自分でも思い、人からも羨やまれていた。その夫が突然白血症でなくなってしまった。残された妻の悲胆は目にも余るものがあった。夫と共に死んでしまいたいといいはたのものもこの妻は永く生きられないのではないかと心配した。

このさまを見て或る人が言った。

「生前あまりに仲よかった夫婦は、片方が死ぬと、一年足らずで一方もあとを追うものだ。だからあまり夫婦仲よくしておくのも考えものだ」と。

これも「生と死の不条理」ではないか。本来仲よくすべき夫婦が、仲よくしていてはいけない、なぜなら「死」がいつ襲ってくるかわからないから。これほど不条理なことがあろうか。それでは家庭の倫理はメチャメチャになってしまう。しかしそうかといって、これも避けえない人生の冷厳な事実なのだ。

(三) ある若い実業青年の会で、一人の青年がこんなことを言った。

「私どもの職場には仕事の神様ともいわれる人が何人かいます。その仕事はその人に聞かなければ何もわからないというような、非常にすぐれた専門家がいます。しかしそうやって他人にわからぬ仕事の世界を一人で独占してしまうことは考えものだと思う。なぜならその人が突然ポックリ死んでしまうと、あ

めようとするならば、人は不可知論者とならずにはおられないでしょう。

信仰と感情

それでは感情がたいせつでしょうか。いうまでもなく、単なる理性で窮めることのできないことが、感情でなっとくさせられることもあります。人が自分の無力を感じて、より大きい、より高い実在者に憧れ頼る心が宗教であると定義した人もいます。詩篇の中にも「神よ、わが魂はあなたを慕いあえぐ。わが魂はかわいているように神を慕い、いける神を慕う」と歌っています（四二・一、二）。信仰にこのような渇望、熱心、憧憬（どうけい）また情操が必要なことはもちろんです。しかし、理性を無視し、感情だけに走ると、はなはだ危険です。そこに脱線があります。一種不可解な神秘主義に陥ったり、浅薄な感傷主義に流れることが多分にあります。

むしろ意志に

知識も感情も宗教にはたいせつなものであるにちがいありません。だが、キリスト教において、その深い真理をよく理解させるのにいちばん役立つものは意志ではないでしょうか。「神のみこころを行おうと思う者であれば……わかる」と主はおうせられています。イエスの人格と教えが、単なる人から来ているのか、それとも永遠の真理である神ご自身からきているか、それがわかるのは神のみこころを行おうとする者であるというのです。つまり、神のご意志を実践窮行する信仰者に神の真理はわかるというのです。

もうすまでもなく、イエスの人格と教えを知的に学び、それを慕い求めるという、知識も感情もだいじ。だが、いちばんたいせつなことは、神のみこころに服従して、それを実行しようとすることなのです。

人にはどんなに理窟で考えてもわからない真理があります。また人は、どんなに理性で知っても、それでもって直ちに信仰者になるというわけにはまいりません。ところが実行して信仰のことがわかり、信仰が進むのです。これは、順序からいえば、逆のようですが、信仰者の実験です。コロサイ人への手紙にも「主のみこころにかなった生活をして神を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って、神を知る知識をいよいよ増し加え」とあります。キリスト教はことばが肉体となった宗教です。その深い真理は、ふところ手でヂット考えただけでわかるものではありません。手を動かし足を運び、実際に生活してみてわかるものです。

何よりも誠意

ですから、初めはわからない点があってもよい。とにかく、これがみこころだと信ぜられるところに服従し、それを実行しようとすることです。あまり理窟にこだわらないで、実際にキリストの御言葉に従い、それを行うことです。そのような生活をつづけているならば、必ずいつか疑点も晴れ、ああそうかとなっとくできるときがまいります。知識の点からだけ進めば、深い懐疑におそわれて、どうにもならなくなるときがあります。感情だけに頼っていると、そこには起伏が伴い、あるいは火が消えたように冷たくさめてしまうこともありましょう。しかし、もし聖書に不審の点がいくらかあっても、感情が衰えるようなことがあっても、決して失望してはなりません。なおよく自ら励んで、神の御旨に服従し、実行することはできるはずです。

すなおな気持で、神のみこころを行おうとする意志。これは誠意です。この誠意はつまり神の賜です。わたしたちにこの誠意さえあれば、神の助けは確実です。たゆまず、おくせず、神のみこころを行おうではありませんか。そしてより尊い真理をさとらせられ、恵みから恵みへ進ませていただこうではありませんか。

山内　六郎

神の真理がわかるために

聖書　ヨハネ七・一〇―一七

ヨハネ福音書の七章をみますと、イエスの人柄と教訓についていろいろの論議があったようです。ある人々は「あれはよい人だ」といい、他の人々は「群衆を惑わす」ともうしました(一二節)。またある者はイエスのお話をきいて「このかたは、ほんとうに、預言者である」といい、さらに他の者たちは「このかたはキリストである」と称えて、群衆の間にイエスのことで紛争が生じたとあります(四〇―四三節)。

その後二千年。世界の歴史の中でこの紛争は繰りかえされました。それはイエスが生きた社会と生きた関係に立っておられる証拠なのです。今もある人は、イエスを世界の大聖者万世の預言者であると考えています。キリスト教の存在が気にいらない者たちは、イエスは社会を惑わすものだといってこれを退けようとします。だが、わたしたちにとっては、彼は神の御独り子キリストであります。イエスをどのように信じるか、このことがキリスト教にとっていちばんだいじな点です。キリスト教はキリストであるといわれますように、イエス・キリストの人格と教えに対する理解こそ、実にキリスト教のかなめであります。

では、どうしたならば、わたしたちはイエス・キリストのことをよくわきまえることができるでしょうか。イエスの「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかた(父なる神)の教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それともわたし自身から出たものか、わかるであろう」(一七節)のみことばの中に、わたしたちはひとつの大きな暗示を受けることができはしないでしょうか。

信仰と知識

ある人は知識だけで信仰上の真理はなっとくされると思っています。宗教を定義して、「至高者を知ること」とした人もいます。もちろん、わたしたちは理性をもっています。そしてその理性の満足をえないと、なかなか信じることができません。ですから、人の理性に訴えて神を証明するという態度は正しいのです。けれども、注意せねばならないことは、人間の理性が冷たく把握したからそのことが真理であるというのではありません。真理は、人の論証を待たなくても、それ自身で真理であるはずです。また人間の理性といいますけれども理性にはおのずから限界があります。親子の愛とか夫婦の情とか、こうしたものがみんな人の理性で割り切れ、三段論法式に証明されるでありましょうか。そこにはもっと深いデリケートなものがあるはず。論理の証明や科学の立証とは別の、そうしたものをはるかに超える事実がそこにはあります。科学者ニュウトンは「自分のもっている知識など子供が大洋のそばで小石を二つ三つ拾って喜んでいるようなもの」といいました。あの広い知識の人でしたけれども、そこには未だ知られない神秘の大海原がようようと横たわっていたのです。それで、絶大奥妙な神の真理を知識だけできわめることは無理があります。「あなたは神の深いことを窮めることができるか」(ヨブ一一・七)。「このような知識(真理)はあまりに不思議で、わたしには思いも及びません。これは高くて達することはできません」(詩一三九・六)。全くそのとおり。知識だけに頼って神の道を窮

西日本教会学校

夏期実務講習会

鳥取県・大山・高原ホテル

8月1日 ―― 3日

中国地方の屋根といわれる鳥取県大山の高原山岳公園で，今年も西日本教会学校の夏期講習会を開催いたします。

主催　ＮＣＣ教会学校部　　　ＮＣＣ視聴覚事業部

主　　題

教会教育の充実前進

全体講義

教会教育の目標……………………………………高　木　　彰
よき教師とは………………………………………長　阪　竜太郎
フレーベルに学ぶ…………………………………七　山　牧　民
教育の問題点………………………………………森　里　忠　生
ペスタロッチに学ぶ………………………………吉　野　丈　夫
日本ＣＳ史に学ぶ…………………………………西　　原　　勇

グループ研究

第一日
- A．管　　理
- B．教　　案
- C．生　　徒
- D．教　　授

第二日
- 1．幼　稚　科
- 2．小　学　科
- 3．中　学　科
- 4．高　等　科

実務講習

1．紙　芝　居　　　　3．絵　　話
2．人形芝居　　　　4．お　　話

申込み方法

定　　員　　120名
費　　用　　申込金 300円　講習費・宿泊費 1900円　計 2200
手　　続　　用紙に所定の事項を書き入れ，300円をそえて申込む事
〆　　切　　7月15日
申 込 先　　神戸市生田区再度筋 258　吉野丈夫

……………………………………キリトリ線……………………………………

申込書

希望分団	大山	1日(　　　　) 2日(　　　　) 実務(　　　　)
	雲仙	第　　　分団（第2希望　　　分団）
送金方法	現金書留 振　　替 為　　替	月　　日 ¥
備　考		

栄光への脱出 EXODUS

70ミリ映画・総天然色

第二次大戦後、中近東に起ったはげしい闘争、パレスチナ戦争を背景に、若人たちの喜びと悲しみ、そしてたくましい姿を壮大なスケールで描いた70ミリ現代劇、総天然色である。祖国イスラエルの再建にすべてを賭ける人間の警嘆に価する意志と行動の物語、そして激しい戦火のただ中に描かれる愛のドラマである。

映画に描かれる事件はすべて事実で、登場人物もほとんど実在し、監督のプレミンジャーは小道具に至るまで綿密な調査の上で忠実に再現している。

原作はレオン・ユリスのかいた「エクソダス」で欧米ではベスト・セラーのトップをゆく問題の小説であり世界ケ国語に訳されている。

わが国でも河出書房から犬養道子氏の飜訳で刊行されている。

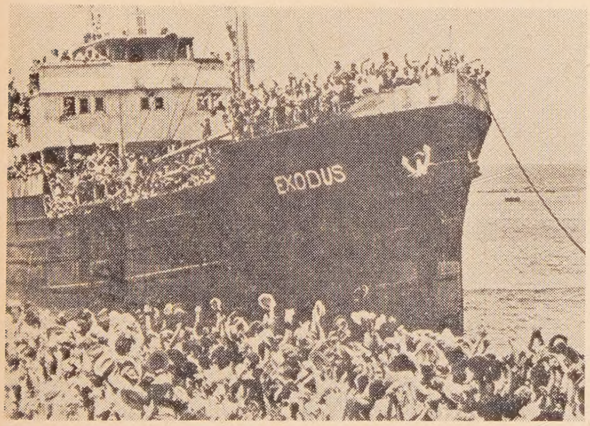
この映画の原名「エクソダス」は旧約聖書の「出エジプト記」によるもので、モーゼに率いられたユダヤの民が国造りの希望にもえて、エジプトを脱出した故事にならい、民族の輝かしい門出を飾るのにふさわしい言葉である。

物語はイスラエル共和国が生れるすこし前、一九四七年、中東はパレスチナの帰属をめぐり複雑な情勢を呈していた。イスラエルはキリスト誕生の地として、又最近はアイヒマン裁判で世界的に注視をあびているが、二千年前からこの国はユダヤ人のものだった。その後国は亡び民族は世界の隅々まで散ったが、第一次大戦頃からイスラエル再建の声が高まり、ユダヤ人たちはパレスチナへ帰えりはじめて来た。この物語の当時は英軍の統治下にあったキプロス島のユダヤ人たちが、苦難と迫害にあいながら、戦火と動乱の中で闘う姿と、そのさなかに起った若い男女の力強い愛情と悲しい別離を描いてあますところがない。

原作の内容も充実しているし、演出のすばらしさも格別で、まことに重厚な映画としておすすめ出来る作品である。

喜びと悲しみ、そして力強い愛！すべての人の血を湧かせ、涙をさそう感動無限の戦争ロマン！この胸に愛を！この腕に母国を！苦難と迫害の道をこえた彼らの行手には栄光の大地が待っている。

（T・S）



CS部ニュース

教会学校教師 夏のプランは いかがですか？

前頁をごらんいただけばわかりますように、今夏の教会学校教師のための講習会は、NCCの教会学校部と視聴覚事業部との主催で行われます。プログラムは各地とも、それぞれの特色を出していますので、教師方が四地区に分れて出席され、九月からの教会学校活動に備えられてはいかがですか。中軽井沢と北海道の両講習会のプログラムおよび案内は前月号に掲載してありますので、それをごらんください。今月号には鳥取の大山と九州の雲仙の講習会プログラムをのせました。今年は各地区の講習会が満員となる可能性が、すでに現れておりますので、各教会学校で、この講習会に、と計画が決りましたらお早くお申込みください。レジャーブームとやらで、避暑地の宿は鼻息があらいそうで定員より後になってしまった方は野宿を願います……なんていうことになりかねないとのこと。お早くお早く。申込先は間違えないようそれぞれのところにお送りください。

来年の夏に アイルランドで （インスティテュート）

一九五八年に日本でキリスト教教育世界大会の開かれたことは、だれしも御記憶と思います。世界大会は四年毎に開かれていたのですが、あれからちょうど四年目の一九六二年にアイルランドで世界キリスト教教育研究協議会（インスティテュート）が開かれることとなりました。残念なことに大会ようのものは、東京で行われたのが最後となる模様で、アイルランドでは世界のキリスト教教育の専問家および関係者約三〇〇名を集めての研究協議会として行われます。すでに議案のための Studey Guide がランドルフ・C・ミラーの筆によって出ており世界各国のNCC教会学校部、又は教育部に送り込まれています。議題は「教会の教育的使命」で、六つの部門に別れて研究されることになっています。日本からは三名の正代議員をアイルランドの会議に送るようにとの世界本部からの要請があり、NCC教会学校部では目下人選中です。

雑誌「教会教育」では九月号よりこの問題を取りあげて遂次発表して行くことにしました。

部会活動あれこれ

福井部会（谷田部泰部会長）
七月一、二日　講座を予定

愛媛部会（二神喜十部会長）
教育週間に合同生徒大会を計画中。第三学期に部会主催の教師養成講座を予定。

熊本第二部会（清水昭部会長）
八月一七日—一九日、県下CS中学生キャンプを開催する。六月七月中にCS説教の交換講壇を行う。一一月二三日に生徒大会を計画。

神戸部会（吉野丈夫部会長）
夏は講習会に合流。秋は生徒大会を計画中。

郡馬部会（オウノミチオ部会長）
八月一日～三日、中学生キャンプを開く予定。

この人の消息

土山牧羔理事、五月の名古屋における教会学校全国大会に発題講師として出席された後、あわただしくアメリカに出発されましたが、九月末に帰国される予定。

金田数男理事六月二十日に出発アメリカ在住の信徒たちを訪問され各地の自由メソジスト教会をまわられて十月中旬に帰国されます。

メリット理事　八月下旬に休暇で帰米されます。

ジーン・マクドナルドさん　世界大会の時まで教会学校部の協力主事であったジーン・マクドナルドさんは、その後、諏訪で伝道されていましたが、この七月五日に一年の休暇でカナダに帰られます。

雲仙キリスト教教育講習会

8月1日——4日

雲仙　ユースホステル

主催　ＮＣＣ教会学校部　　　ＮＣＣ視聴覚事業部

全体講義

キリスト教教育と伝道……田　坂　惇　巳
礼　拝　論……木　村　義　夫
キリスト教視聴覚概論と現状……原　　恵

分団研究

1分団　話の仕方（下級）……田　坂　惇　巳
2分団　〃　（上級）……岡　正　治
3分団　視聴覚的分級法……原　恵
4分団　絵ばなしの作り方やり方……東　道　男
5分団　フランネルグラフ……西　富三郎
6分団　透視紙芝居……丸　山　正　昭
7分団　人形芝居……柳　辰三郎
8分団　ＣＳ牧会の種々相……木　村　義　雄

申込み方法

定　員　300名
費　用　300円　宿泊費 2000円　合計 2,300円
手　続　用紙に所定の事項を書き入れ会費をそえて御申込み下さい
〆　切　7月15日
申込先　福岡県八女市福島区中宮野町　松富　勲

……キ リ ト リ 線……

氏　名		男　女	
		才	
職　業			
住　所			
教会名及び役目		教師経験年数　年	
		担　当　級　年	

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年七月一日発行
発行人　山北多喜彦
印刷所　精文堂印刷株式会社

教会教育　第九六号

定価四〇円（〒共）
半年分　二三〇円
一年分　四五〇円

発行所
東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会　教会学校部
振替東京九八七一三番